

富田林市埋蔵文化財調査報告30

平成10年度

富田林市内遺跡群発掘調査報告書

1999・3

富田林市教育委員会

はじめに

富田林市は、大阪府の南東部に位置し、ほぼ市域中央部を南から北へ流れる石川によって形成された中央平野部、金剛山系に連なる南部の山地部と西部の丘陵部から成っています。これら平野や丘陵の上には古くから人々が生活を営み、その足跡として多くの遺跡が残っています。また、本市を中心とする南河内地域は、奈良の飛鳥に対して近つ飛鳥と呼ばれ、難波から飛鳥への交通の要衝として栄えたところです。そして、仏教文化の拠点施設であります古代寺院が数多く存在することでも知られています。

本書で報告いたします新堂廃寺は、飛鳥時代の瓦が出土することで古くから注目された遺跡ですが、過去の発掘調査によって飛鳥時代創建の建物は確認されないまま、永らく「幻の寺」として謎に包まれたまま現在まで至ってきました。このたびの大阪府教育委員会との共同調査によりまして、初めて創建時に遡る中門の発見等新堂廃寺の伽藍配置や造営過程までも明らかになるなどの重要な成果を得ることができました。本書が、地域の古代史解明の一助となれば幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査に際して、多大なるご協力を賜りました土地所有者である大阪府をはじめ、地元関係各位ならびに有益なご指導をいただきました諸先生方に厚く御礼申し上げますとともに、今後も文化財保護行政に対し、一層のご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成11年3月

富田林市教育委員会

教育長 清水 富夫

例 言

1. 本書は、富田林市教育委員会が1997年度と1998年度に、国庫および府費の補助を受けて実施した新堂廃寺の範囲確認調査の調査報告書である。
2. 調査は、新堂廃寺等調査指導委員会のほか、文化庁ならびに大阪府教育委員会の指導・助言のもとに、1997年度の現地調査を富田林市教育委員会文化財保護課 今西淳、平方扶左子が担当し、1998年度の現地調査を中辻亘、平方扶左子が担当した。内業調査は粟田薫が担当し、1998年4月1日に着手し、1999年3月31日に終了した。
3. 本書で使用した方位と標高は、すべて磁北と東京湾標準潮位で表示した。また、土層の色調については、小山・竹原編『新版標準土色帖』を使用した。
4. 本書の執筆は、遺物を粟田が、それ以外を中辻が行った。なお、本書の編集は中辻、粟田が行い、平方が補佐した。
5. 本書の作成にあたって、遺物の実測は粟田、楠木理恵が行った。また、遺構の製図は平方が、遺物の製図は粟田が行った。
6. 本書で報告した出土遺物および記録類は、富田林市立埋蔵文化財センターで保管している。
7. 調査の実施にあたっては、府営緑ヶ丘住宅の方々をはじめ、大阪府建築都市部住宅整備課、大阪府教育委員会文化財調査事務所の方々のご協力を得た。また、下記の諸氏に有益なご助言を得た。ここに記して感謝の意を表します。(敬称略)

井藤徹 井西貴子 上田睦 上原真人 大脇潔 金子裕之 黒崎直 近藤康司 清水昭博
坪井清足 中西靖人 花谷浩 藤澤一夫 森山義博 山下隆次 山中一郎

【新堂廃寺等調査指導委員会委員】

北野耕平 (神戸商船大学名誉教授)

森 郁夫 (帝塚山大学教授)

猪熊兼勝 (京都橘女子大学教授)

金田章裕 (京都大学教授)

栄原永遠男 (大阪市立大学教授)

広瀬和雄 (奈良女子大学教授)

菱田哲郎 (京都府立大学助教授)

松村恵司 (奈良国立文化財研究所飛鳥藤原京発掘調査部考古第2調査室長)

玉井 功 (大阪府教育委員会文化財保護課主幹)

本文目次

はじめに

例言

I 位置と環境	1
II 調査に至る経過	3
III 調査成果	3
(SH97)	
1. 基本層序	3
2. 遺構	4
3. 遺物	8
4. まとめ	23
(SH98)	
1. 基本層序	24
2. 遺構	24
3. 遺物	28
4. まとめ	31
報告書抄録	40
図 版	

挿図目次

図1 調査地位置図	1
図2 調査区位置図	2
図3 遺構平面・断面図(第1面)	5
図4 遺構平面図(第2面)	6
図5 出土土器	9
図6 軒丸瓦	13
図7 軒平瓦	15
図8 丸瓦	16
図9 丸瓦	17
図10 平瓦	18
図11 平瓦	19
図12 平瓦	20
図13 平瓦	21
図14 土製品	22
図15 遺構平面図(第1面)	24
図16 遺構平面・断面図(第2面)	25・26

図17	軒丸瓦	29
図18	軒丸瓦・軒平瓦・垂木先瓦	30
図19	回廊廃絶状況（北方トレンチ）	32
図20	回廊創建平面・断面図（北方トレンチ）	33
図21	西方トレンチ平面・断面図	33
図22	南門造営後の遺構面および中門南門間整地状況断面図	35・36
図23	遺構変遷図	37
図24	伽藍復元図	38
図25	伽藍変遷図	39

表 目 次

表1	溝一覧表	4
表2	ピット一覧表	7
表3	ピット土坑一覧表	27

図 版 目 次

図版1	(上) SH97調査区北西部遺構全景（南から） (下) SH97調査区南西部遺構全景（東から）
図版2	(上) SH97調査区西部土坑1遺物出土状況（南から） (下) SH97調査区西部土坑1完掘状況（南から）
図版3	(上) SH97調査区北東部第4層螺髪出土状況（南から） (下) SH97調査区北東部溝近景（東から）
図版4	(上) SH97調査区北東部遺構全景（南から） (下) SH97調査区南東部遺構全景（西から）
図版5	(上) SH98第1面東半部遺構全景（東から） (下) SH98第1面西半部遺構全景（西から）
図版6	(上) SH98第2面東半部全景（東から） (下) SH98第2面中門東半部全景（南から）
図版7	(上) SH98第2面中門・回廊取付部近景（南東から） (下) SH98第2面 同 上 （東から）
図版8	(上) SH98南壁断面近景（北東から） (下) SH98回廊断面近景（西から）
図版9	(上) SH98第2面北西部近景（西から） (下) SH98第2面中門前面素弁蓮華文軒丸瓦出土状況（東から）
図版10	(上) SH98第2面中門前面素弁蓮華文軒丸瓦出土状況（西から） (下) SH97出土遺物（磚仏・螺髪・不明土製品）

新堂廃寺

I. 位置と環境

新堂廃寺は、大阪府の南東部富田林市緑ヶ丘町に所在する。現在は大阪府営緑ヶ丘住宅地内にあり、主要伽藍の中心部分は公園として保存されている。市内の中央には石川が流れ、大和川に合流する。石川左岸には安定した河岸段丘の平坦地が存在し、縄文時代からの遺跡が確認されている。

新堂廃寺の西方に近接して、なだらかに羽曳野丘陵が南北に長く連なり、西側に比べて急傾斜で短い東斜面には丘陵をさざむ谷がある。北方1.5kmには東西にはしる喜志街道が竹内街道に通じ、南方0.6kmには東西に富田林街道が通る。東方には、石川までの間に市内では最も広い平坦地が開け、0.3kmには南北にはしる巡礼街道、さらに0.3km東方には東高野街道が通り、当地が交通の要衝に立地していることがわかる。東高野街道に沿って主要な集落遺跡が存在する。中野遺跡は新堂廃寺の東に広がる弥生時代からつづく遺跡で、統一新羅時代の壺の破片や奈良時代の須恵器製硯など

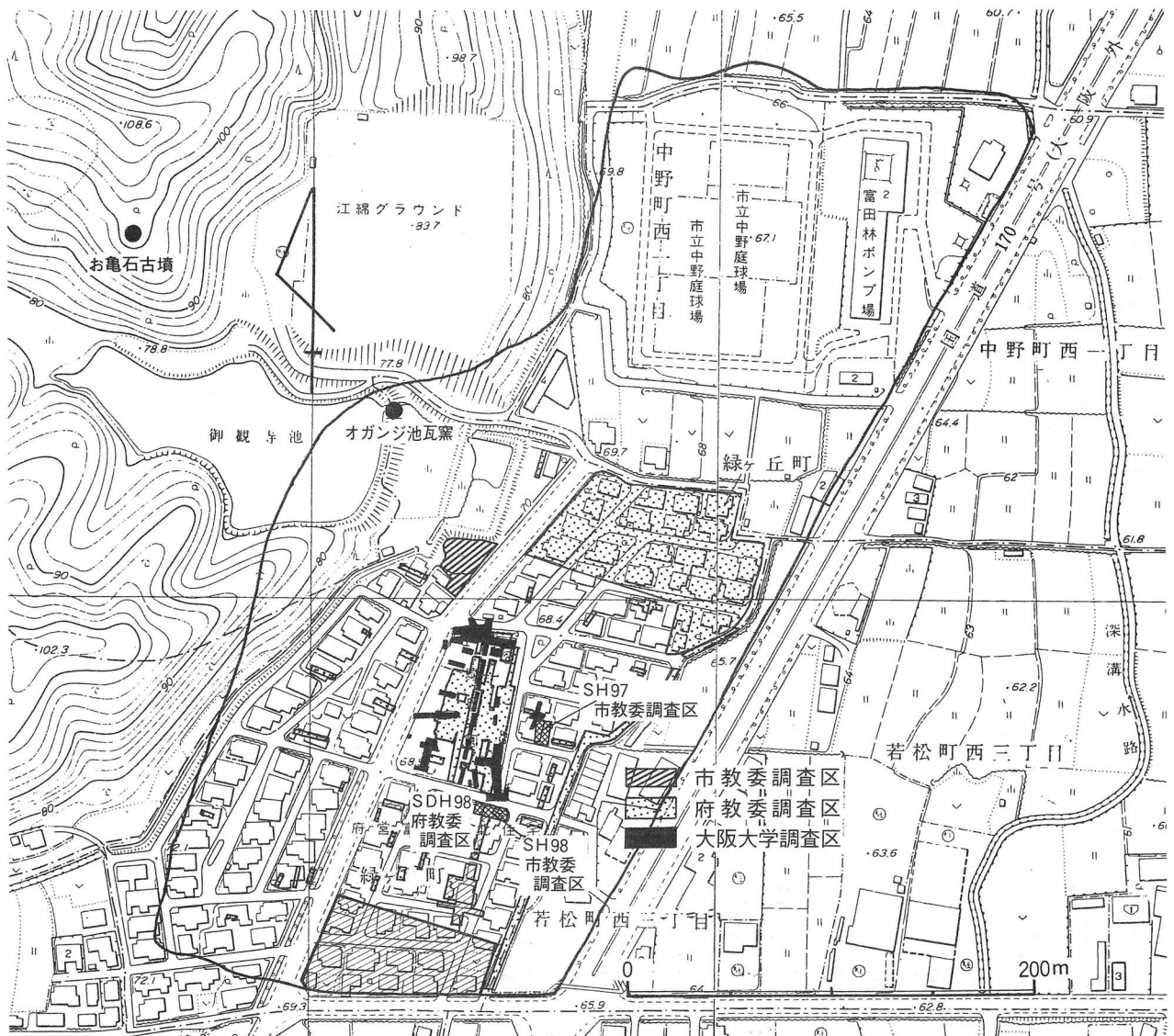


図1 調査地位置図

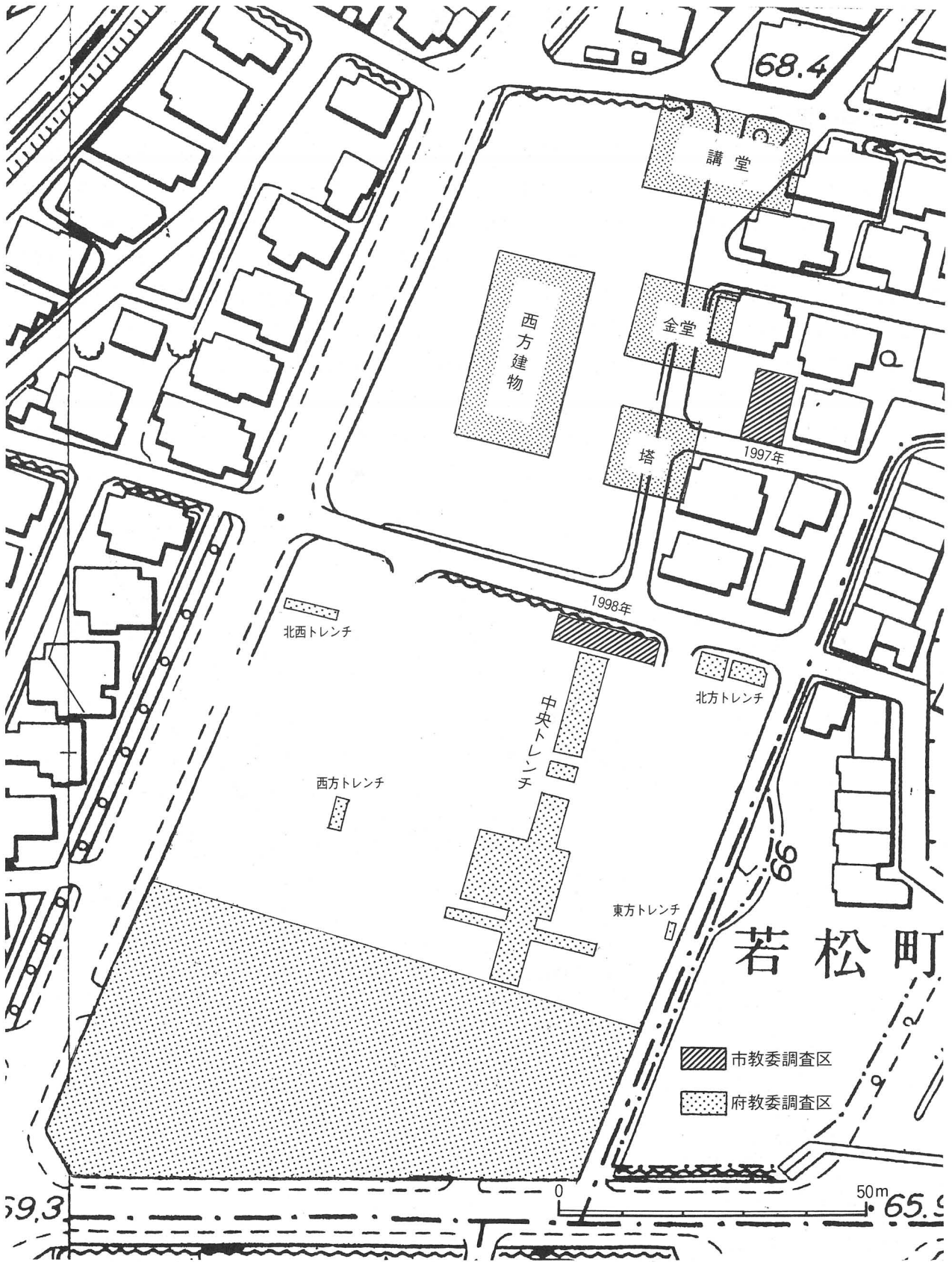


図2 調査区位置図

が出土しており、単なる集落跡ではなく官衙的性格を有した集落であったとみられる。また、奈良時代以降の大量の瓦の出土から新たな寺院が存在した可能性が推測され、注目される。

当廃寺周辺には、寺院に関連する遺跡が近接して所在する。北西方の谷をせき止めて造られた灌漑用ため池の東北隅に、新堂廃寺創建時の飛鳥時代から天平時代までの所用瓦を供給したオガンジ池瓦窯がある。^(註1) 飛鳥から白鳳時代に操業された半地下式有段登窯と同一主軸上方に築かれた白鳳から天平時代操業の半地下式無段登窯の2基が確認されている。また、瓦窯北西方の丘陵から東に伸びる尾根上には、横口式石棺の周囲に護壁状に平瓦が積み重ねられてあるお亀石古墳があり^(註2)、被葬者が新堂廃寺の壇越であったことを推測させる。

(註1)『オガンジ池瓦窯現地説明会資料』1986 富田林市教育委員会

(註2)北野耕平『富田林市史第1巻』1985 富田林市

II. 調査に至る経過

新堂廃寺は、1936年に石田茂作氏によって「飛鳥時代寺院址の研究」で紹介された南河内最古の古代寺院である。その後、1959年に府営住宅建設が計画されたため、範囲確認調査が行われ、中心部分の3500m²が保存されることになった。そして、翌年には保存区域の本格的な発掘調査が行われた。その結果、飛鳥時代創建の建物跡は検出されなかったが、白鳳時代に再建された4棟の建物跡が確認された。南から塔・金堂・講堂が一直線上に並び西方に南北に長い建物が配置することが判明した。

その後、住宅の老朽化に伴い建て替えが計画されたため、府営住宅内において32カ所のトレンチを設定し、寺域確定のための範囲確認調査が行われ、南北約2町、東西約1町の範囲を寺域と推定された。

これを受けて、新堂廃寺および関連するお亀石古墳、オガンジ池瓦窯を国の史跡指定に向けて取り組むことになり、1997年度から国庫補助事業として富田林市教育委員会が大阪府教育委員会の指導を受けて、寺域の発掘調査を実施していくことになった。

1997年度は、寺域の東側の状況を確認する目的で約50m²を調査対象とし、現地調査は、1998年3月19日から31日まで実施した。

1998年度は、府営住宅建て替えに伴い、寺域南側の発掘調査が大阪府教育委員会によって実施されることに併せて、今まで未確認であった寺域南側の確認を目的として範囲確認調査を合同で実施することになった。新堂廃寺推定伽藍中軸線を主軸として東西17m、南北5mの調査区を設定し、1998年7月14日から現地調査を開始した。

III. 調査成果

SH97

調査地：富田林市緑ヶ丘町1604-1

調査面積：50m²

1. 基本層序

調査区全体の基本層序は、6層ある。上から順に表土（第1層）、10YR5/6黄褐色粘質土

(第2層)、10Y R 5 / 2 灰黄褐色弱粘質土に2.5Y 5 / 3 黄褐色粘質土がブロック状に混入 (第3層)、2.5Y R 5 / 3 黄褐色粘質土 (第4層)、10Y R 5 / 6 明黄褐色粘質土 (第5層)、10Y R 5 / 6 黄褐色混砂粘質土 (第6層) である。第5層は、調査区の北半部のみに、第6層は北西部を除いて認められる。

2. 遺構

検出した遺構には、ピット6、土坑1、溝7、瓦溜り2、落ち込み、地山の高まりがある。土坑1及び溝1は第4層から、溝5・6・7及び瓦溜り1・2は第6層からの掘り込みである。

土坑1

調査区の中央で検出した。南北4.7m、東西7.3m以上で東西に長い。深さは、最も深いところで0.6mである。底はほぼ平坦で、部分的に浅い溝状の落ち込みが認められる。埋土は大別して3層である。上から暗灰黄色弱粘質土に黄褐色粘質土がブロック状に混入及び灰オリーブ色混砂粘質土に黄褐色粘質土がブロック状に混入 (厚さ0.3m)、暗青灰色粘質土に黄褐色粘質土が若干ブロック状に混入 (厚さ0.25m)、青灰色砂質土 (厚さ0.05m) の順に堆積する。

遺物は、磁器、陶器、瓦質土器、瓦器、黒色土器、土師器、須恵器、サヌカイト剥片および飛鳥～奈良時代の瓦が大量に出土している。また、鎌倉時代の軒平瓦も1点出土している。第1層下層では顕著な瓦の堆積が認められ、磚仏が1点出土している。第2・3層では遺物の出土は比較的少ない。

溝

調査区北西部、北東部、南部で7条検出した。溝1は、土坑1に流れ込む第4層上面で検出した溝である。溝2・3・4は、南北方向の溝で、埋土も共通することから同一溝の可能性も考えられる。溝5・6・7は、東西方向の溝である。埋土も共通している。溝6と7は、同一溝の可能性も考えられる。溝5・7は溝4に切られている。

番号	規模(m)	深さ(m)	埋土	遺物
1	(1.2)×(0.4)	0.20	灰褐色弱粘質土	磁器・土師器・須恵器・瓦
2	(2.2)×(0.7)	0.02	灰黄色砂質土	土師器・瓦
3	(0.8)×(0.4)	0.02	灰オリーブ色砂質土	土師器・瓦
4	(2.7)×(0.8)	0.06	灰黄色砂質土	瓦
5	(7.5)×(1.2)	0.19	黄褐色粘質土	土師器・瓦・螺髪・土製品
6	(1.9)×(0.5)	0.15	黄褐色粘質土	瓦
7	(2.7)×(0.7)	0.10	黄褐色粘質土	土師器・瓦

表1 溝一覧表

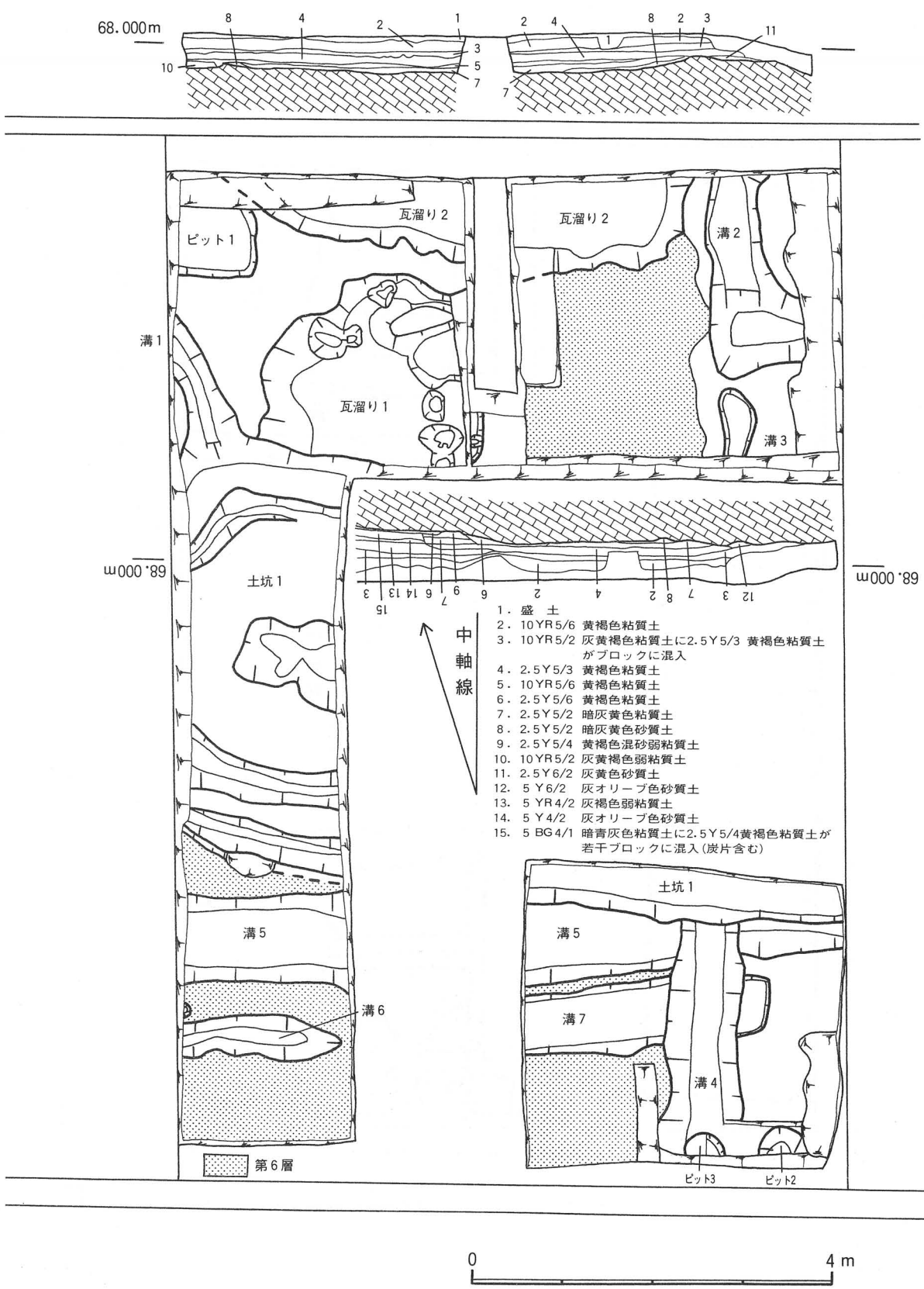


図3 遺構平面・断面図(第1面)

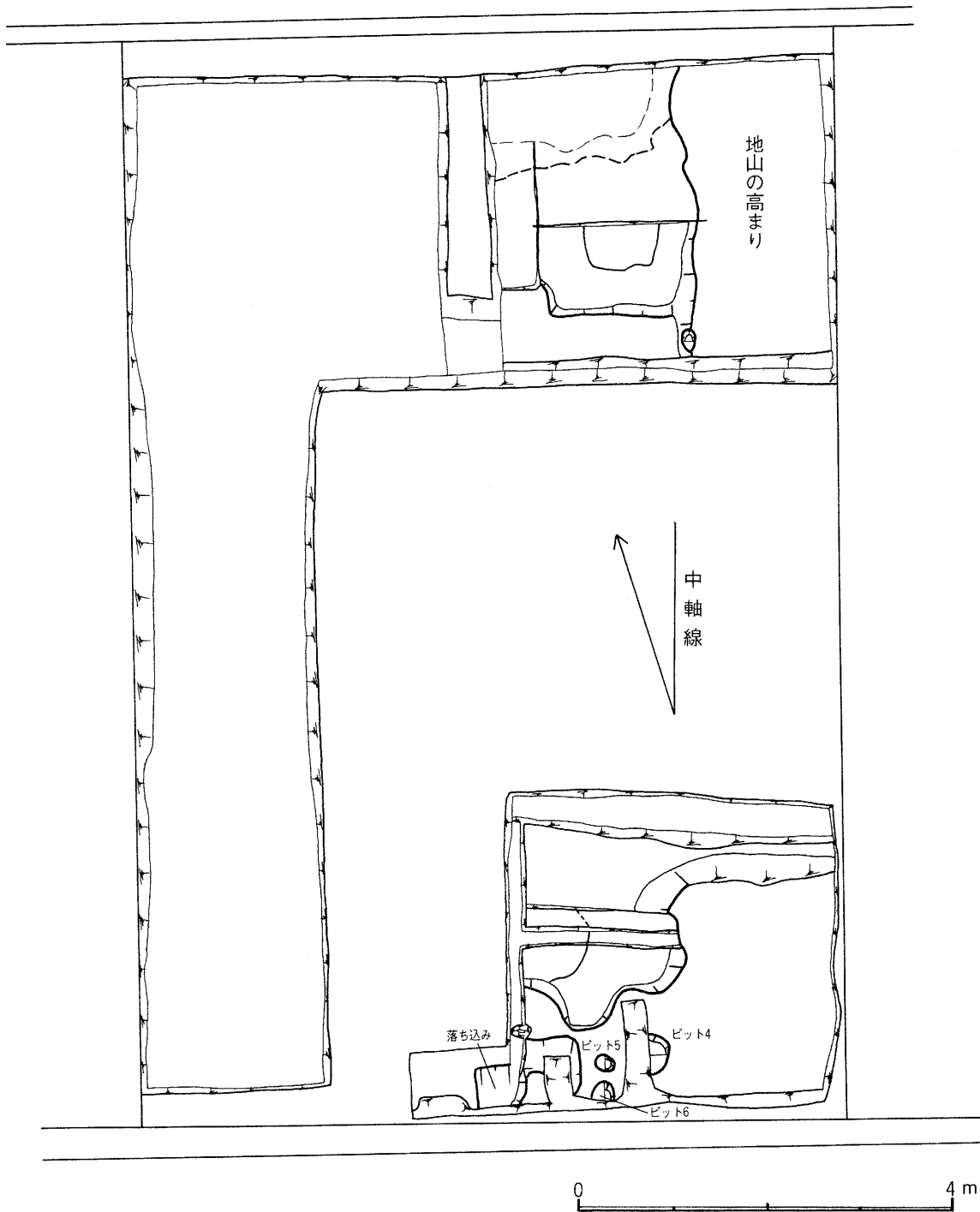


図4 遺構平面図（第2面）

瓦溜り1

調査区の北西部で検出した。南側は土坑1によって切られている。平面形は不整形な楕円形を呈している。遺構の西から北にかけては、地山から掘り込まれているが、東側では第6層から掘り込まれている。東西幅約2.5m、南北2.1m以上、深さは0.12mを測る。底面には北から東にかけて特に凹凸が顕著に見られる。埋土は上下2層あり、暗灰黄色粘質土と黄褐色混砂弱粘質土である。上層では炭片が多く見られ、比較的大きな平瓦が認められるが、瓦の密集は顕著に認められない。また、中央部のみに見られる。厚さは0.07mである。下層は遺構全体で見られるが、出土する瓦は小片が多く、炭片もあまり認められない。遺物は飛鳥から奈良時代の瓦と土師器が出土している。

瓦溜り2

調査区の北端で検出した。遺構の大半が北壁外にあるため、規模等は不明である。北壁断面での深さは0.1mである。埋土は瓦溜り1と同様に上下2層あり、暗灰黄色粘質土と黄褐色混砂弱粘質土である。上層では炭片が見られ、東側で瓦が密集するが、出土状況からは一定の企画性は認められない。遺物は飛鳥から天平時代の瓦の他に須恵器、土師器、黒色土器を含む。下層は浅く出土する瓦は小片が多く、炭片もあまり認められない。土師器、黒色土器を含む。

落ち込み

調査区の中央南端で検出した不整形な落ち込みである。最も深い部分で0.15mを測る。埋土は黄褐色混砂弱粘質土である。

ピット

調査区の北西隅と南東隅で検出した。

番号	平面形	規模(m)	深さ(m)	埋土	遺物
1	(隅丸方形)	(0.90)×(0.80)	0.06	暗灰黄色弱粘質土	土師器・須恵器・瓦
2	(隋円形)	(0.50)×0.30	0.14	灰褐色弱粘質土	
3	(隋円形)	0.40×(0.25)	0.02	黄褐色粘質土	
4	(円形)	(0.90)×(0.40)	0.07	黄褐色混砂弱粘質土	
5	隋円形	(0.24)×(0.14)	0.02	〃	
6	(隋円形)	0.24×(0.17)	0.04	〃	

表2 ピット一覧表

地山の高まり

調査区の北東端部で南北方向の地山の高まりを検出した。調査地周辺は西から東に下降する自然地形であるのに反して東側が高く、西側の地山とは0.05～0.1mの段差が認められる。調査区南東部は、本来、地形的にみて最も低い部分であるにもかかわらず、土坑1および溝4によって切られているものの、地山の高まりが認められることから、南北方向に直線的に延びると想定される。

3. 遺物

今回の調査では軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、道具瓦などの瓦類、須恵器、土師器、製塩土器、黒色土器、瓦器、瓦質土器、陶器などの土器類、白磁、染付などの磁器類、螺髪、磚仏などの土製品類、サヌカイト、凝灰岩、安山岩、黒色片岩、花崗岩、砂岩、礫岩、チャート、片麻岩、流紋岩、片麻状花崗岩などの石類^(註1)のほか、鉄釘、焼粘土塊が遺物整理箱（内寸46.8cm×30cm×13.6cm）に合わせて約136箱分出土している。これらのうち約134箱分が瓦類で、その8割が土坑1からの出土である。すでに遺構の項で述べたとおり、今回の調査で出土した遺物は、新堂廃寺廃絶後に形成された遺構からの出土であることから土器類などの一部の遺物を除いては、検出された遺構の形成時期と直接関連するものはほとんどない。また、その残存状況も悪く、細片が多い。石類はサヌカイトを除いて加工痕跡が認められず、また一部の石材を除いてその大半が新堂廃寺周辺の地盤、もしくは現石川の河床にも存在する泉南酸性岩もしくは和泉層群などに起源をもつものであることがわかっているが用途不明である。鉄釘は断面方形のものも認められる。

以下、土器類、磁器類については遺構ごとに、また瓦、土製品については各器種ごとにまとめる。他の遺物については紙面の関係上、割愛した。

(註1) 石材の鑑定は藤井寺高校の森山義博氏にお願いした。

1) 土器、磁器類

遺構ごとに土器、磁器類の出土状況を記述する。記述は、溝、土抗、瓦溜り、ピット、包含層の順に行う。

溝 2

土師器が6点出土している。うち4点は胎土の精良さ、器壁の厚さからみて、坏、皿類と考えられる。他の2点は甕、鍋類と考えられる。これらの遺物の所属時期は8～9世紀に比定できるが、この遺構が切り込んでいる第6層目で平安時代と考えられる黒色土器が出土していることから、これらの遺物がこの遺構の時期を確実に反映しているとは考えられない。

溝 3

土師器が1点出土している。胎土の精良さ、器壁の厚さからみて坏、皿類と考えられる。この遺物の所属時期は8～9世紀に比定できるが、この遺構が切り込んでいる第6層目で平安時代と考えられる黒色土器が出土していることから、これらの遺物がこの遺構の時期を確実に反映しているとは考えられない。

溝 5

土師器が8点出土している。うち6点は胎土の精良さ、器壁の厚さからみて坏、皿類と考えられる。他の2点は甕、鍋類と考えられるが、うち1点は口縁部が残っていて、「く」の字に外反して端部で丸く肥厚する甕で、明橙色の色調を呈する。この甕は口縁部の形状から8～9世紀に所属時期が比定できる。

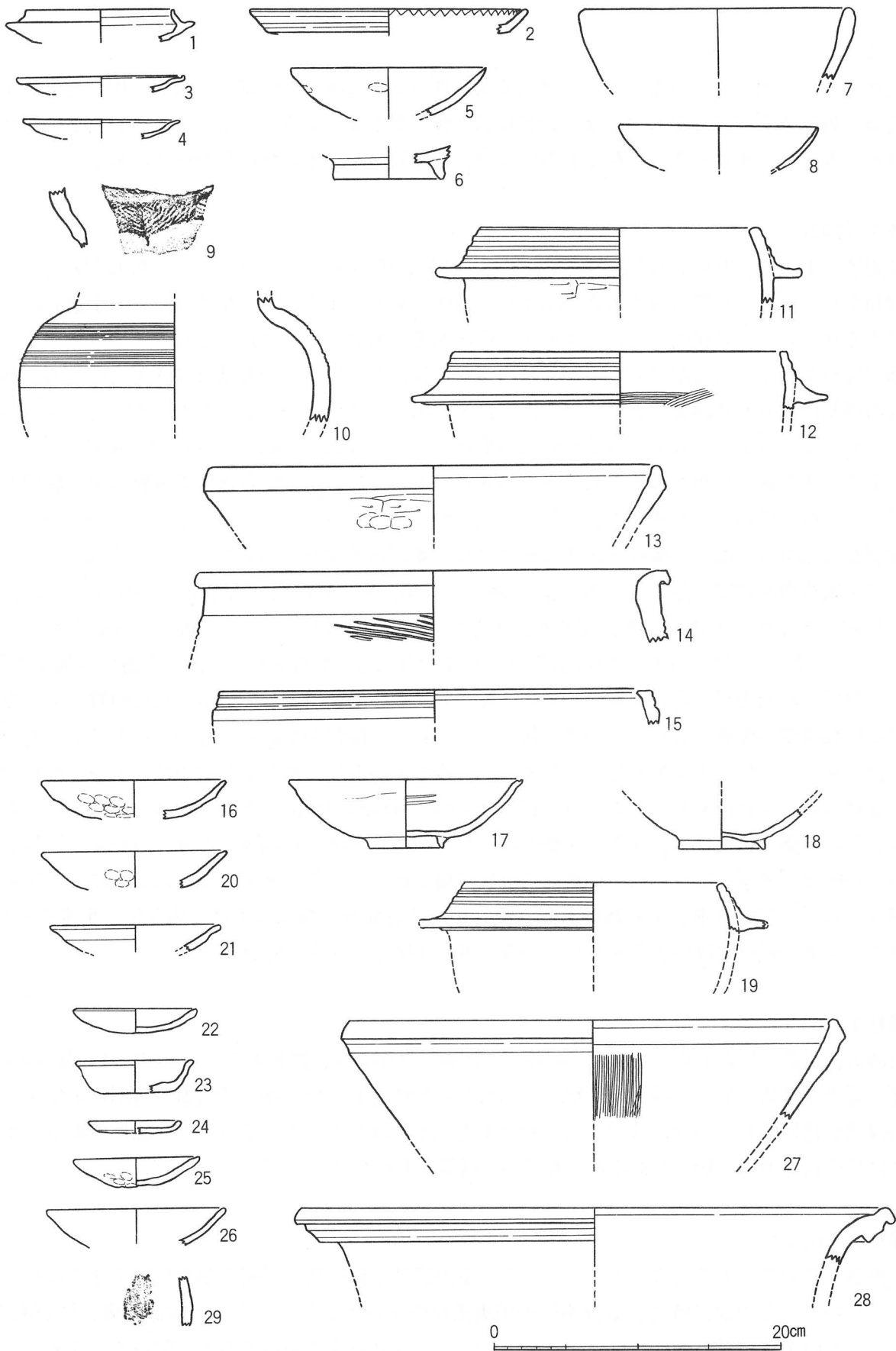


图5 出土土器

溝 6

土師器が9点出土している。内1点は口縁部が残っている坏で、底部から斜めに開いて立ち上がった後、外反する口縁部をもつ。9～10世紀に所属時期が比定できる。他は胎土の精良さ、器壁の厚さからみて坏、皿類と考えられるものが5点、甕、鍋類と考えられるものが3点ある。

土坑1 (図5)

須恵器、土師器、黒色土器、瓦器、瓦質土器、陶器、磁器が出土している。今回の調査で、土器、磁器類をはじめとして最も多く遺物が出土した遺構である。須恵器は所属時期が6～7世紀代に比定できる坏、8～9世紀代に比定できる坏、壺がある。前者の坏は3点あるが、そのうち(1)は全体に扁平な坏で、口縁部の立ち上がりは内傾した後、直立する。受部はほぼ水平にのびる。残存部分の調整は回転なで調整である。後者の坏は8点出土しているが、平底のものが6点と高台の付されたものが1点ある。残り1点は口縁部の形状から8～9世紀に比定できるが、底部の状況は不明である。その他に坏類と考えられるものが6点出土している。これらは他の遺物の出土状況からみて6～7世紀代のものと考えられるが、底部しか残存していないので明らかではない。壺類には細頸壺が2点ある。他に所属時期が明らかでない甕、壺類が9点出土している。土師器は8～9世紀に所属時期が比定できる坏、皿(2)、鉢(7)類、10～11世紀に比定できる椀(5. 6)、中世に比定できる椀、小皿類、甕、羽釜が出土している。小皿は「て」の字状の口縁部をもつもの(3. 4)がある。羽釜は有段の口縁部をもつ瓦質土器と同じ形態をもつ。黒色土器には椀がある。すべて内黒で断面方形の高台をもつ。瓦器は椀(8)と小皿が出土している。高台が残っていないものは比較的深い椀部をもつ、その残存状況からそれほど高台が形骸化していないタイプのものから高台がドーナツ状にまで形骸化してしまっているものがある。瓦質土器は中世の羽釜、練鉢の他に、近世の甕、火鉢がある。羽釜(11. 12)はすべて有段の口縁部をもつ。練鉢(13)は片口の可能性が高い。甕(14)は平行タタキ調整の施された筒状の体部から内傾した後、外折する口縁部をもつ。口縁部の肥厚状況から14～15世紀に所属時期が比定できる。羽釜(15)は大型品で内傾する口縁部をもつ。陶器は壺、すり鉢がある。壺(10)は肩部から胴部にかけて張り出す形態をもつ。肩部には4条一組の沈線が2帯施されている。磁器は伊万里焼きの椀がある。

瓦溜り1 (図5)

土師器、瓦器、瓦質土器が出土している。土師器には坏、椀、甕がある。坏(16)は底部の丸い、全体に扁平な椀状を呈す。椀(17. 18)は高台の付されたもので、高台は断面三角形状を呈す。甕は口縁部が比較的長くのび、端部で丸く肥厚する。瓦器は1点出土しているが、細片である。瓦質土器には中世の羽釜(19)があるが、有段の口縁部をもつ。

瓦溜り2 (図5)

須恵器、土師器、黒色土器が出土している。須恵器は7世紀代に所属時期が比定できる蓋が1点出土している。その他に時期、器種不明の須恵器片が1点出土している。土師器は皿、坏がある。皿は「て」の字状口縁のものが目立つ。坏(20. 21)は丸い底部からそのまま開いて、端部で丸くおさまる口縁部をもつ。黒色土器には内黒の椀がある。

ピット1

須恵器と土師器が1点ずつ出土している。細片のため、時期、器種とも不明である。

ピット2

土師器の椀が1点出土している。高台の付されたものである。

包含層（図5）

須恵器、土師器、製塩土器、黒色土器、瓦器、陶器、磁器が出土している。

【第1層目】瓦質土器と製塩土器が出土している。瓦質土器には練鉢（27）がある。製塩土器（29）は内面に布目の認められる奈良時代のものである。

【第2層目】須恵器、土師器、磁器、が出土している。

【第3層目】須恵器、土師器、黒色土器、瓦器、陶器が出土している。須恵器は6～7世紀の口縁部に立ち上がりをもつ坏がある。土師器には小皿（22）がある。黒色土器は内黒の椀である。陶器は常滑の壺（28）の口縁部がある。13世紀に比定できる。

【第4層目】須恵器、土師器、黒色土器、瓦器、陶器、磁器が出土している。須恵器の坏（23）は平底で小型品である。土師器は10～11世紀前後の坏類と中世の小皿（24）がある。

【第5層目】土師器が出土している。

【第6層目】土師器、黒色土器が出土している。黒色土器は内黒の椀である。

2) 瓦 類

軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、道具瓦があるが、圧倒的に平瓦が多く、次に丸瓦が多い。遺構の時期と関連するものが鎌倉期を除いて認められない。新堂廃寺出土瓦については北野耕平^(註1)、藤澤一夫^(註2)、井西貴子^(註3)によって詳細に報告がなされている。とりわけ軒瓦については今回の調査で出土したものの中に、既往の調査出土のものと大きく変わるような発見はなかった。そこで軒瓦については井西の分類に従ってまとめる。しかし、丸瓦、平瓦については、既往の報告の分類では不十分な資料が出土していることが判明していることから、新たに分類基準を設定する必要性が生じている。これについての詳しい論考は別に準備をしているので、ここでは平・丸瓦については図示するだけにして（図8～13）、軒瓦についてのみ報告する。なお、軒瓦の中に井西の分類の中に含まれていない鎌倉時代のものが認められるが、これについても北野・藤澤によって報告されているものである。飛鳥時代創建の新堂廃寺とつながるものかどうか明らかではないので、鎌倉期の軒瓦として新堂廃寺の分類形式とは別に記述する。

(註1) 北野耕平『河内新堂廃寺』1960 大阪大学

(註2) 藤澤一夫『河内新堂烏含寺』1961 大阪府教育委員会

(註3) 井西貴子『新堂廃寺発掘調査概要Ⅱ』1997 大阪府教育委員会

軒丸瓦（図6）

鎌倉時代のもの以外に6形式確認している。

I A 0 2 形式（素弁 8 弁蓮華紋軒丸瓦）

3点出土している（6～8）。中房には1+4の蓮子を配し、中房の周りに周溝がめぐる。花卉は膨らみをもち、立体的である。弁端に珠紋を配し、外縁は素縁である。中房の周りの周溝に範傷をもつことと花卉のふくらみからI A 0 2形式を彫り直したものであることが指摘されている。瓦当裏面には回転を利用したなで調整が認められる。

I A 0 3 形式（素弁 8 弁蓮華紋軒丸瓦）

5点出土している（1～5）。中房には1+4の蓮子を配し、中房の周りに周溝がめぐる。紋様構成はI A 0 2形式とおなじであるが、花卉はふくらみをもたない。弁端に珠紋をもち、外縁は素縁である。瓦当裏面には指頭圧痕と回転を利用したなで調整が認められる。最も残存状況の良い（1）でこの形式の瓦を観察すると、接合丸瓦に粘土板の重ね痕の認められることから、粘土板巻き付け技法で製作されていることがわかる。凹面の布目は3cmあたり16×14本（側面の平行糸目×端面平行の糸目）を数える。凸面の調整は横方向の回転を利用したなで調整が施されている。側面は破面部分になで調整が施されている。なお、面取りは行われていない。色調は灰色のものと橙褐色のものがある。胎土は石英、長石が岩石、もしくは鉱物として多量に含む。また、わずかであるが、泥岩もしくはチャート起源と考えられる赤色砂粒を含む。焼成は硬質のものと軟質のものがある。

II A 0 6 形式（単弁 8 弁蓮華紋軒丸瓦）

山田寺式の軒丸瓦である。1点出土している（9）。蓮弁の中央に稜がとおるが、子葉に稜はない。胎土は石英、長石と泥岩起源と考えられる黒色砂粒が含まれる。色調は灰色で硬質である。

II A 0 6～II A 0 8 形式（単弁 8 弁蓮華紋軒丸瓦）

山田寺式の軒丸瓦の外縁部分だけである。8点出土している（10～15）。三重の圏線がめぐる。外縁の高さは1.7～2.0cmを測る。（11）は瓦当側面にも4重弧が施されている。丸瓦との接合部分の残っているものの中に、瓦当裏面に歯車状の切り込みの認められるものが2点ある。その歯車状の切り込みには鋸歯状を呈すものと方形状のものがある。胎土は石英、長石と泥岩起源と考えられる黒色砂粒が含まれる。色調は灰色で硬質のものと黒灰色、黒褐色で軟質のものがある。

II A 0 9 形式（複弁 8 弁蓮華紋軒丸瓦）

川原寺式の軒丸瓦である。5点出土している（16～21）。8弁の複弁で、大形の中房に1+5+10の蓮子が配されている。中房の外周に凸線がめぐる。外縁は内傾し、斜面に面違鋸歯紋が施されている。胎土は石英、長石、泥岩起源の黒色砂粒、泥岩もしくはチャート起源の赤色砂粒を多量に含む。色調は灰色で硬質のものと橙色、褐灰色で軟質のものがある。（22）はこのタイプの瓦当に接続すると考えられる丸瓦である。

IV A 1 2 形式（複弁 8 弁蓮華紋軒丸瓦）

平城宮6304型式の軒丸瓦である。6点出土している（23～29）。8弁の複弁である。外区に凸線を介して連珠紋と線鋸歯紋が施されている。胎土は石英、長石、泥岩起源の黒色砂粒、泥岩も

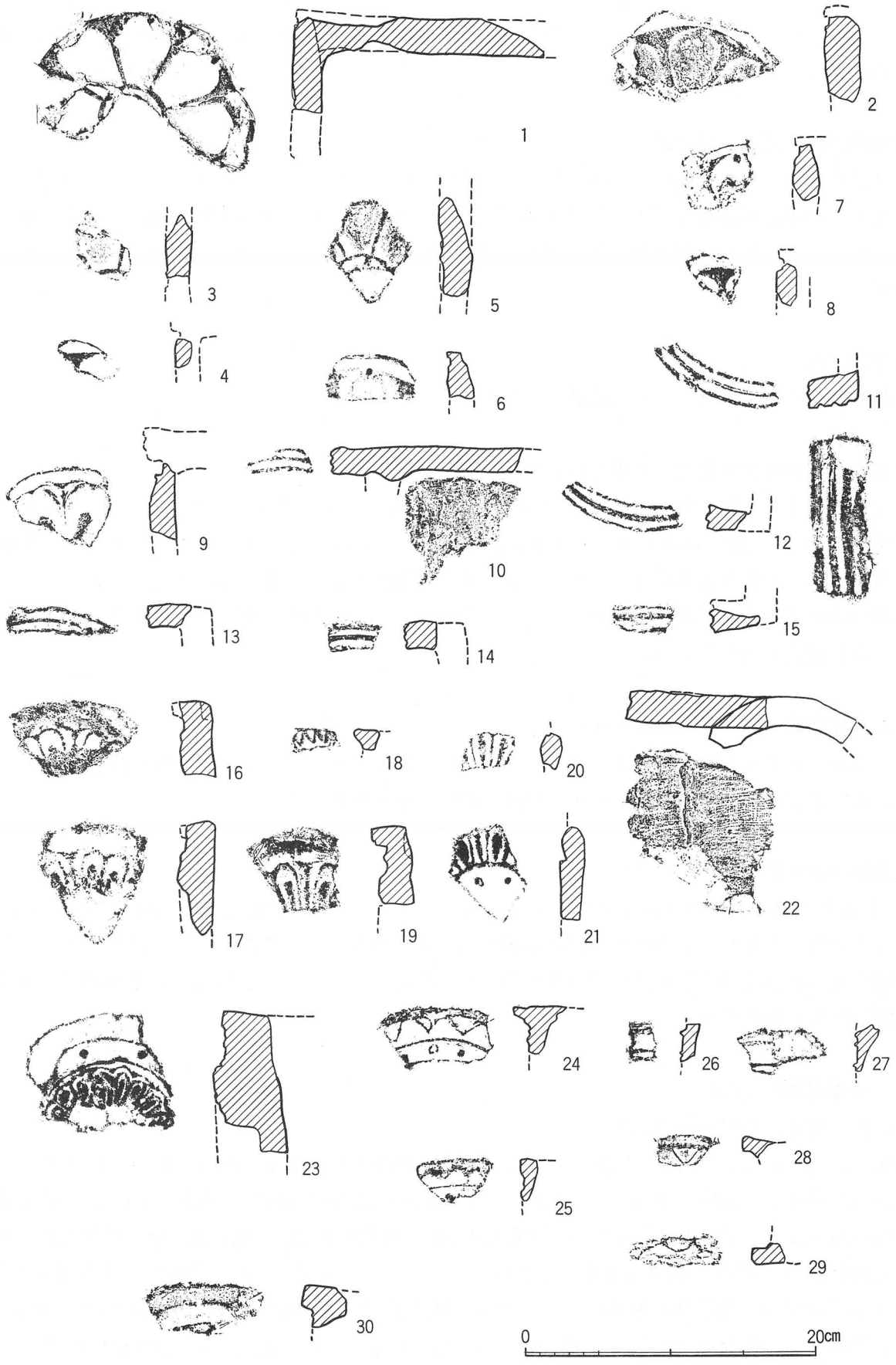


图6 軒平瓦

しくはチャート起源の赤色砂粒を多量に含む。色調は灰色で硬質のものと橙灰色、暗褐色で軟質のものがある。

鎌倉期の軒丸瓦（三巴紋軒丸瓦）

1点出土している（30）。尖頭部が中心で接触している尾の長い三巴紋で、外区に24点の連珠帯を配している。外縁は幅広の素縁であるが、出土したものは外縁部分と外区外縁にめぐる圏線が残っているだけである。胎土は石英、長石、泥岩起源の黒色砂粒を含む。色調は灰色で、やや硬質である。

軒平瓦（図7）

鎌倉時代のもの以外に3形式確認している。

ⅡB01～ⅡB02形式（四重弧紋軒平瓦）

山田寺式もしくは川原寺式軒丸瓦に伴うと考えられている軒平瓦である（31～38）。4重弧紋の軒平瓦である。（36）は顎下面にも4重弧紋が施されていることから、同様に瓦当側面に重弧紋が施されている山田寺式の軒丸瓦（11）と組み合わせ可能性が高い。ⅡB01形式とⅡB02形式は重弧紋の彫り込みの深さによって分けられているが、今回のものでは明瞭に分けることができなかった。合計12点出土している。

ⅣB03型式（均斉唐草紋軒平瓦）

平城宮6664型式の軒平瓦である（43～50）。8点出土している。均斉唐草紋を2回転半施している。外区はすべて連珠紋。内区と外区の間には界線がめぐる。

鎌倉期の軒平瓦（連珠紋軒平瓦）

三巴紋軒丸瓦に伴う軒平瓦である。1点出土している。内区を中心に「×」印、その左右に6点ずつの連珠紋を配し、そのまわりには界線がめぐる。外縁は素縁である。削りだして作りだされた段顎であるが、最終になで調整が施されている。胎土は1～3mmの石英、長石、微細な雲母を含む。色調は灰色で軟質である。

3) 土製品類（図14）

磚仏、螺髪、不明土製品がある。

磚仏は3点出土している。2点（1、2）は長方形の小型の磚仏である。他の1点（3）は磚仏の表面が剥離した破片である^{（註1）}。（1）には天蓋部と仏の顔の部分が残存している。周縁部は唐草紋が施され、上部で天蓋と交わる。残存長28.6mm、残存幅20.0mm、残存最大厚（仏顔面部）8.6mm、推定幅約25mmを測る。色調は明橙色で土坑1から出土している。（2）は磚仏の中央部分である。周縁部にかすかに唐草紋の痕跡が認められる。残存長22.3mm、残存幅18.5mm、最大厚7.7mmを測る。胎土は精良で、色調は淡橙色で4層目から出土している。（3）は残存部分が台形様を呈す。器表面には赤色顔料と墨で何か描かれているが不明である。胎土は精良で、色調は淡橙色を呈す。

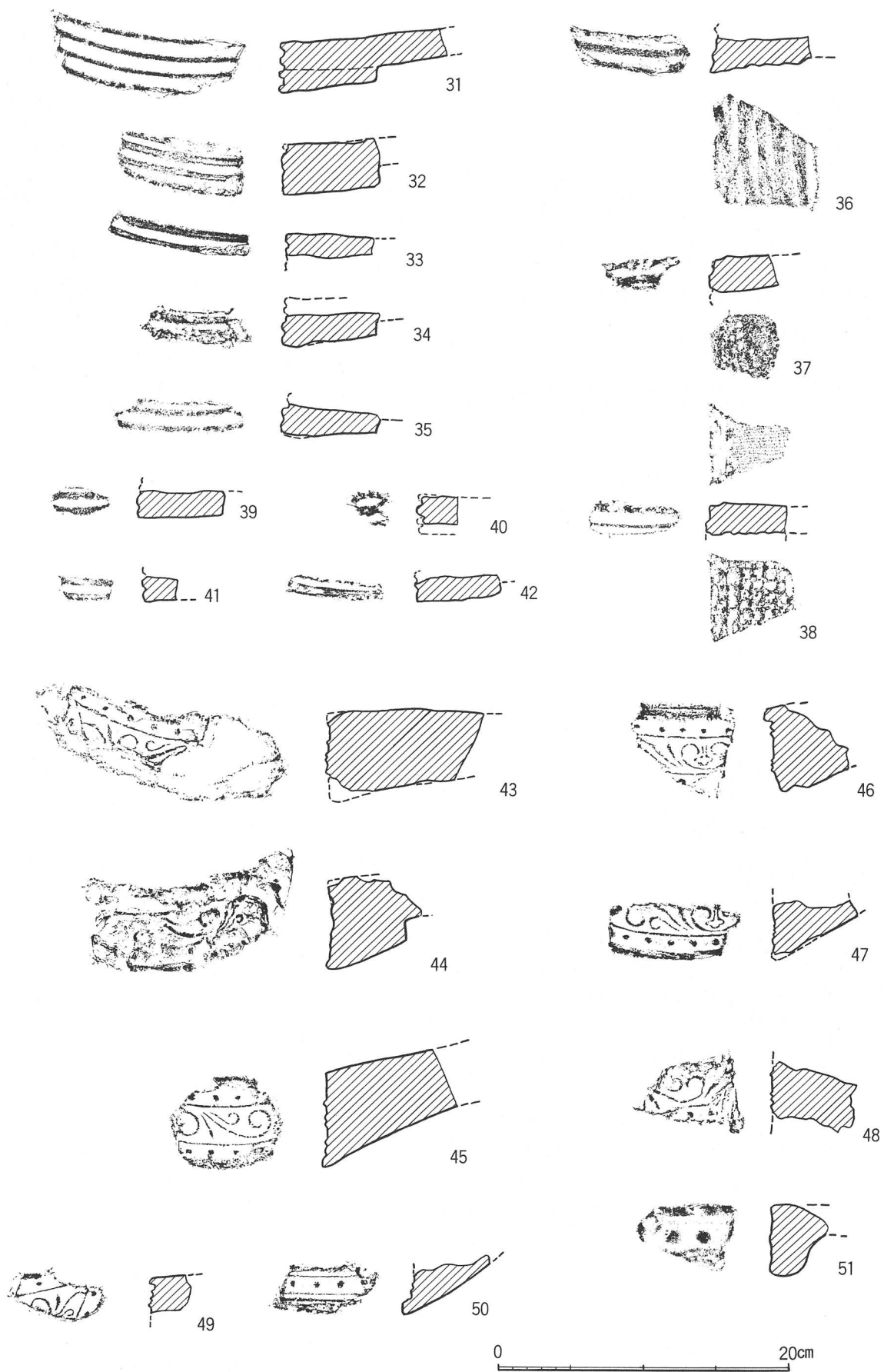
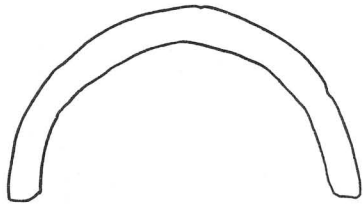
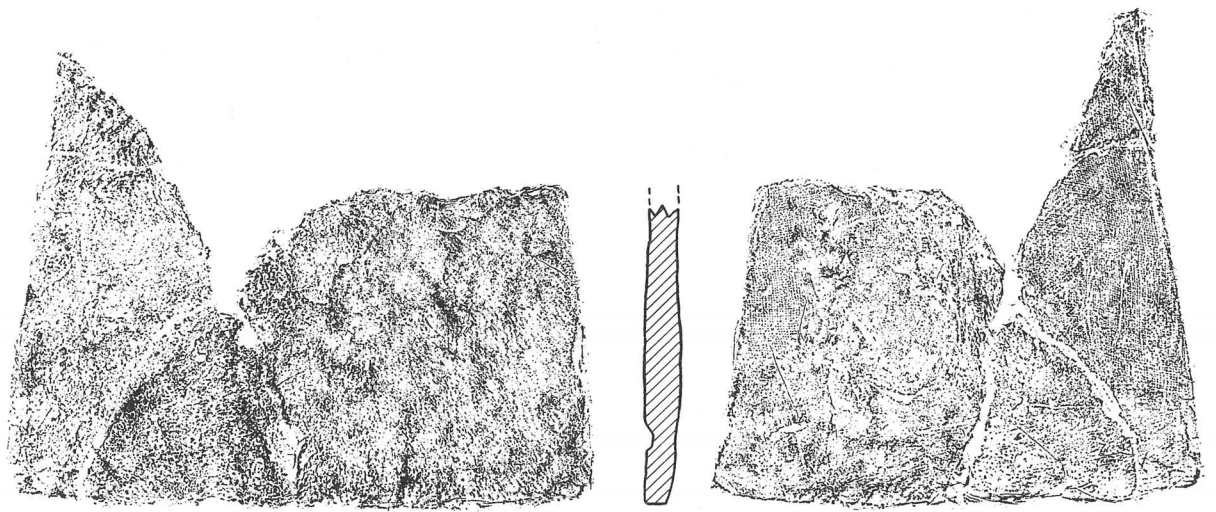
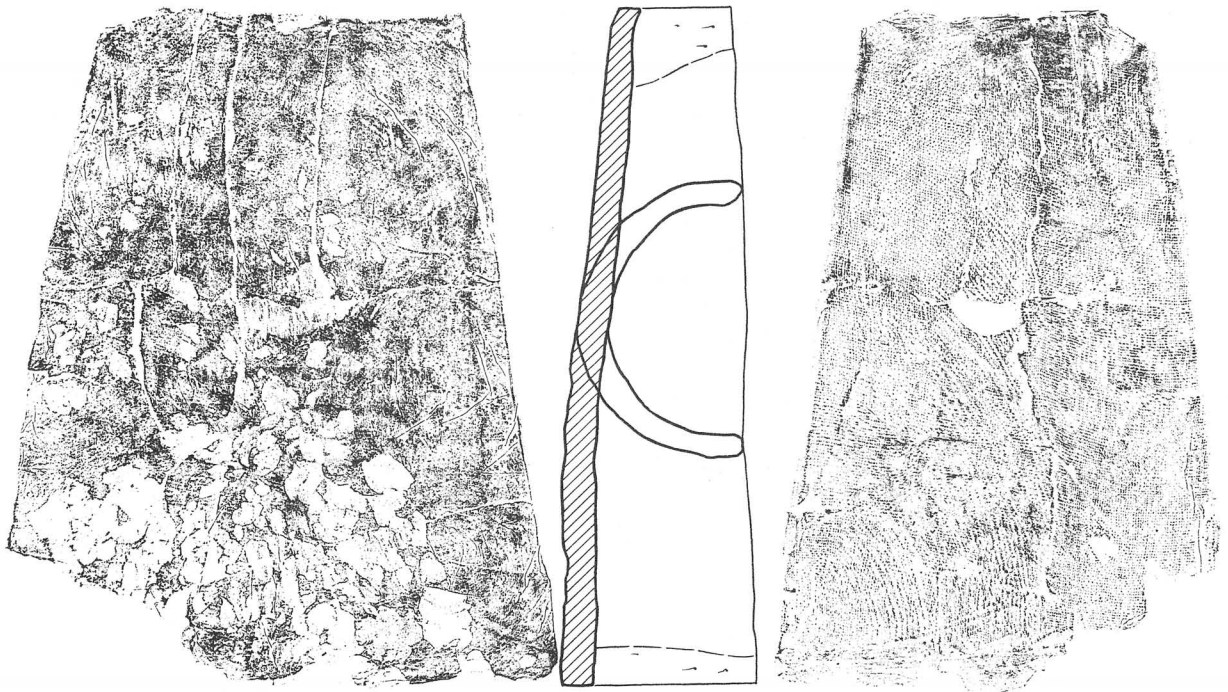


图7 軒平瓦



52



53



图8 丸瓦

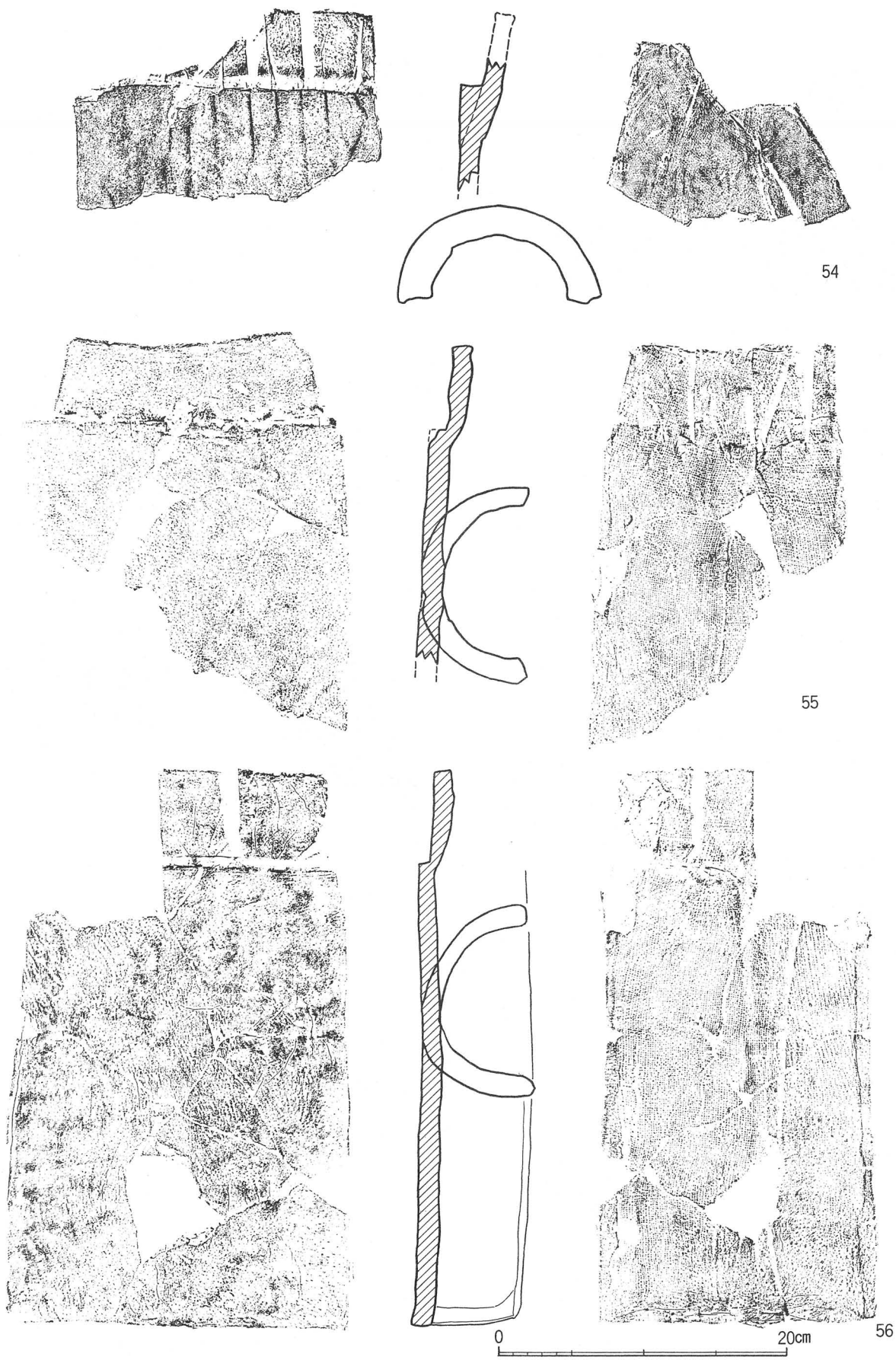


图9 丸瓦

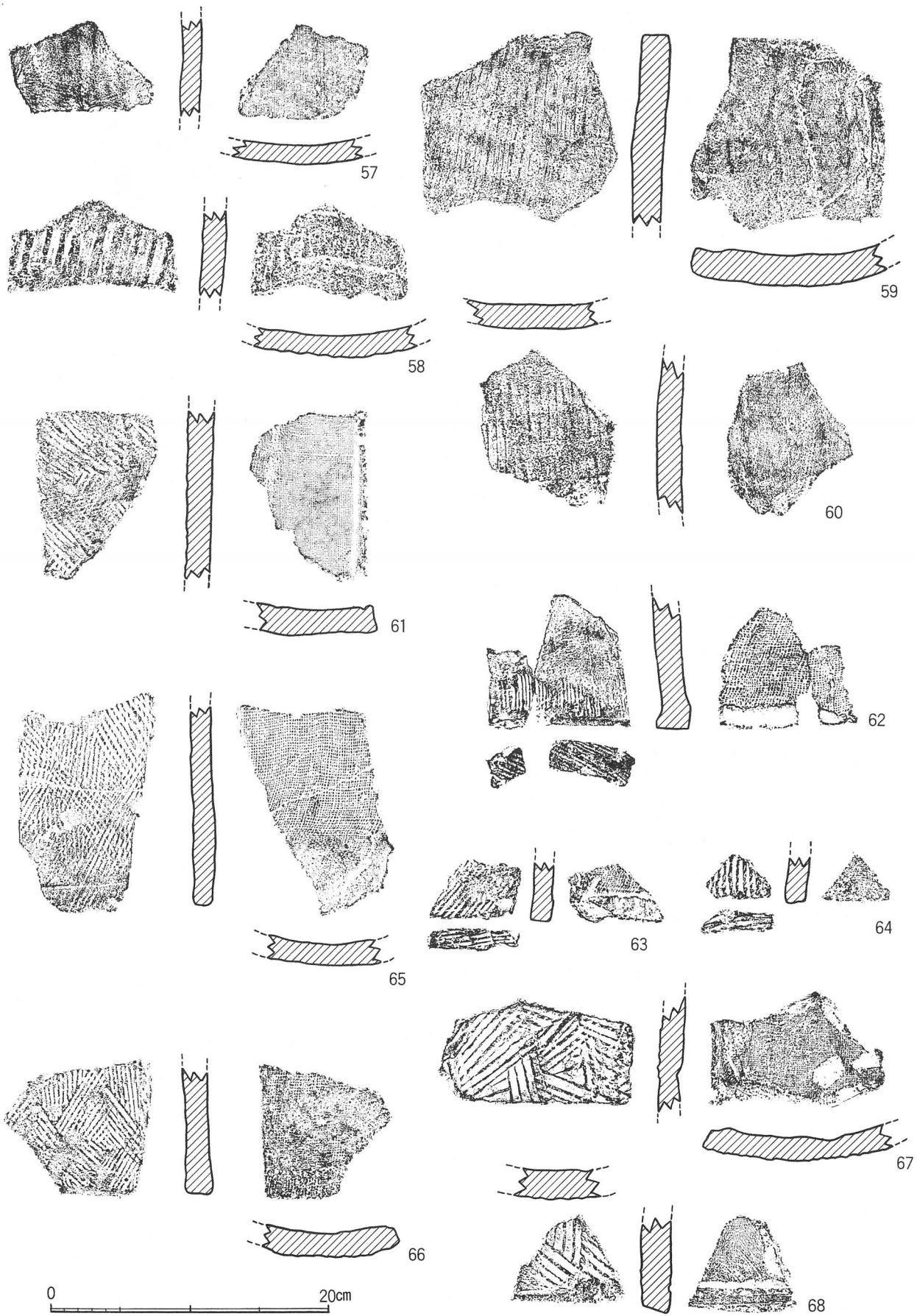


图10 平瓦

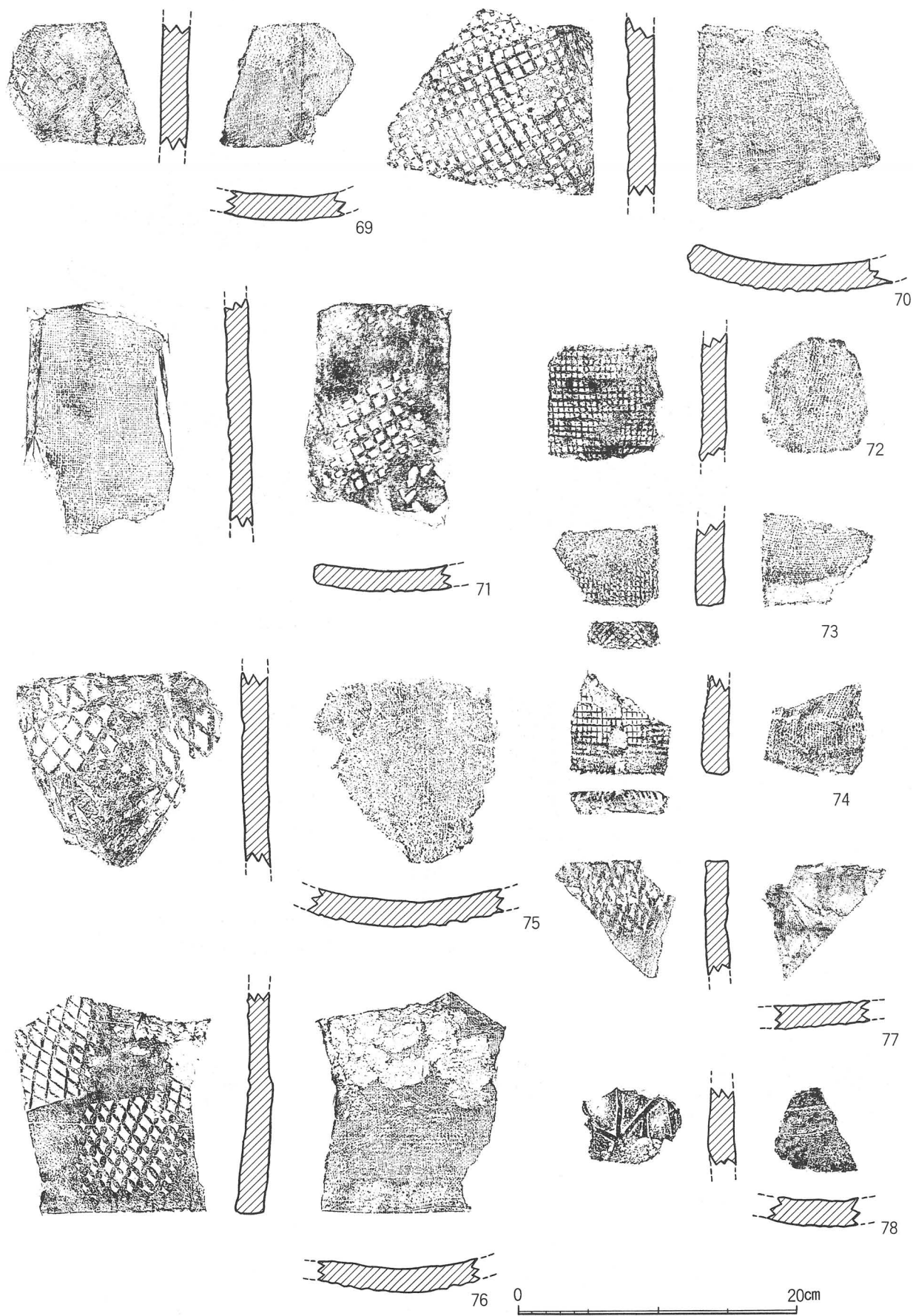
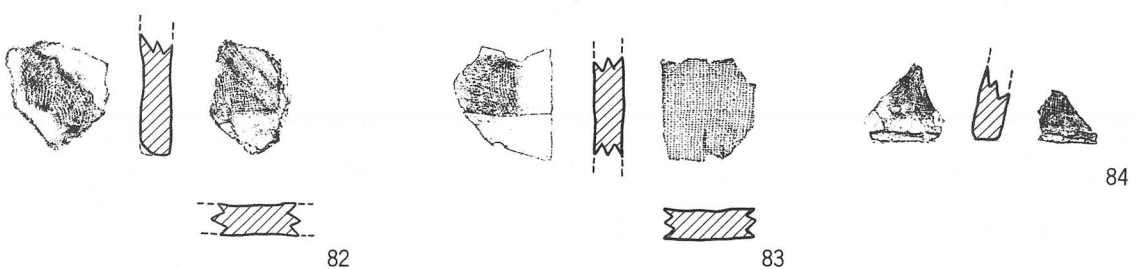
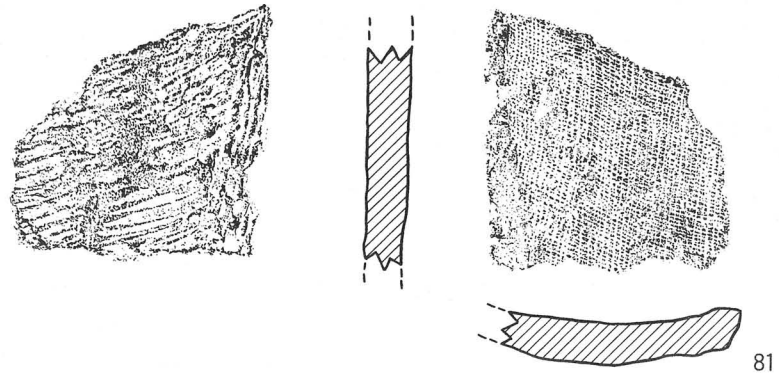
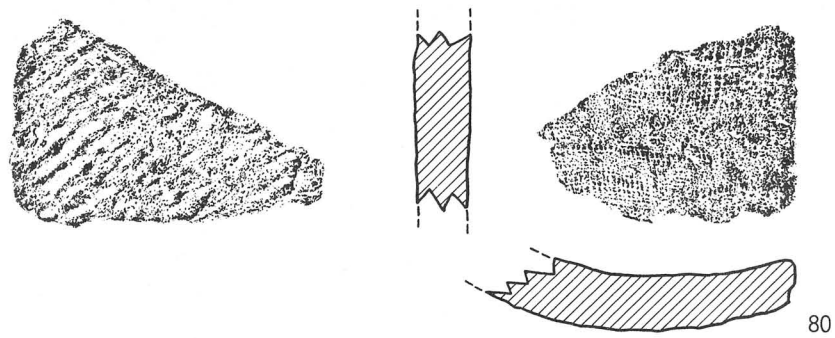
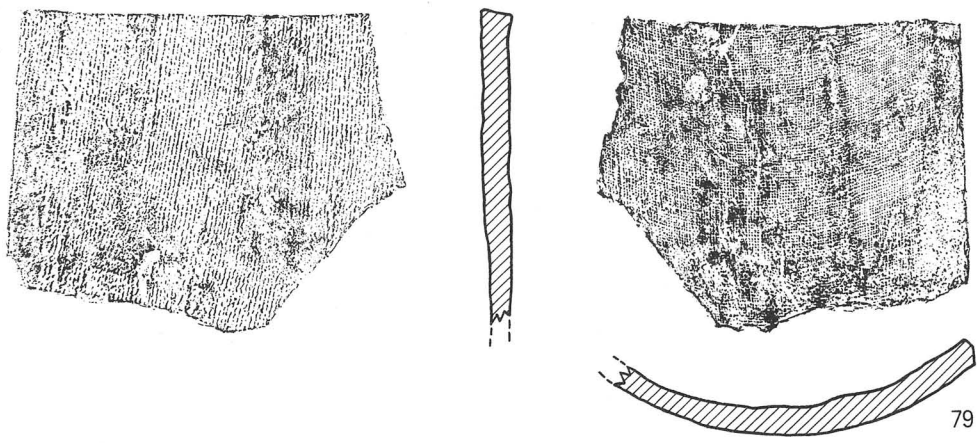
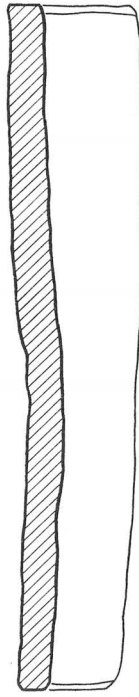


图11 平瓦

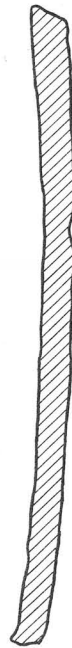


0 20cm

图12 平瓦



85



86

0 20cm

图13 平瓦

第3層目から出土している。

螺髪は3点出土している。すべて右巻きで、高さ32mm前後、基部直径24mm前後を測る。色調は明橙色のもの暗橙色ものがある。すべて二次焼成を受けているが、特に(8)は頂部がばさついた様になり、暗灰色に変色している。

不明土製品は4点出土している。そのうちの2点は半球形の土製品である。(4)は直径24.9mm、最大厚15.0mmを測る。半球形の中央部に直径3.5mmの円孔が穿たれている。胎土は精良で、色調は暗灰色を呈す。第2層目から出土している。(5)は直径17mm、最大厚9.3mmを測る。胎土は精良で、色調は暗灰色を呈す。二次焼成を受けて胎土がばさついた様になっている。大きさからみて土製仏像の白豪かもしれない。溝5から出土している。

他の2点については、脚部もしくはつまみ様を呈しているが、小片のためもとの形態は不明である。

(註1) 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館の清水昭博氏にご教示頂いた。

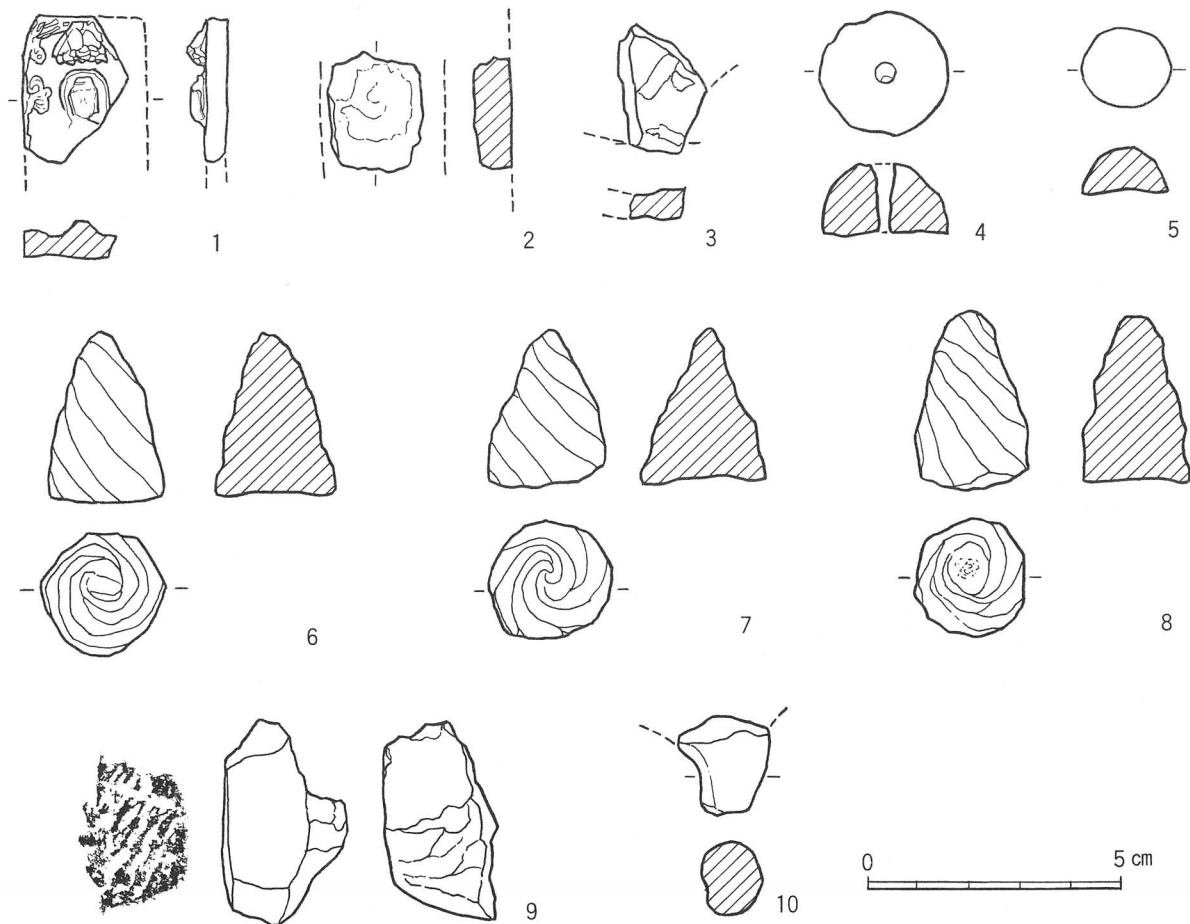


図14 土製品

4. まとめ

今回の調査区は、1960年に大阪府教育委員会によって発掘調査が実施され^(註1)、伽藍中心部の金堂跡が確認された南東側に近接した位置にあたる。東側部分については、過去にトレンチ調査が行われたのみ^(註2)で、明瞭な建物遺構の確認はされていなかったが、藤澤一夫氏が、西方建物と対称となる東方建物の存在を提唱されていることから^(註3)、その建物遺構の有無が課題となっていた。今回の調査では寺院廃絶後、後世の水田化によって著しく遺構面が削平されたことが判明し、明確な建物痕跡は認められなかった。しかしながら、部分的にその存在を推測させる地山の高まりを見いだすことができた。以下、調査成果について列挙する。

検出した遺構は、4期に分けることができる。つまり、第6層直下の地山面の時期（Ⅰ期）、第6層上面を遺構面とする時期（Ⅱ期）、調査区東端部で検出した南北溝の時期（Ⅲ期）、第4層上面を遺構面とする時期（Ⅳ期）である。Ⅳ期については、土坑1とこれに流れ込む溝1が該当する。出土遺物から近世に比定できる。Ⅲ期については、南北溝が周辺条里の地割りと一致することなどから中世の水田化に伴う時期と推測される。Ⅱ期・Ⅰ期については、第6層の上層と下層面にあたる。1960年の調査時、本調査地西側の金堂周辺は地山上に建物が築かれている。また、塔跡周辺では、飛鳥時代の瓦のみを含む整地層が確認され、建物周辺の堆積層中に平安期の土器を含むことが判明していることから、第6層中に黒色土器を含む点で共通する。

次に、調査区の東端部に沿って認められる南北方向の地山の高まりについて考察する。調査区における東西地山面の比高差は約0.1mあり、西から東に下降する自然地形に反して東側が高い。この東側の隆起した地形は南北に長く、新堂廃寺伽藍の中軸線の方に沿うように西側の地山とは0.05~0.1mの段差をもっている。段差付近では玉石の配列などの建物基壇痕跡は認められなかった。しかしながら、伽藍中軸線と一致することから何らかの建物基壇の西縁にあたる可能性も想定できるが、狭い範囲での制約から詳細については把握できない。この地山の高まりを建物基壇と仮定した場合、東方建物を想定しなければならないが、1960年に検出された西方建物の東辺と伽藍中軸線までの距離は15.73mであるのに対して、地山段差から伽藍中軸線までの距離は約17.4mであり、約1.7m東方に位置することになる。遺構の時期については、伽藍中央部では創建時の地表が削られていると想定すると、白鳳期に上限を見出すことができる。

出土した遺物のうち瓦が大半を占め、コンテナ100箱以上を数えるが、ほとんどが土坑1からの出土で、地山の高まりの性格等を決定するに足る瓦の出土状況は認められなかった。飛鳥~奈良時代と鎌倉時代の瓦の他に磚仏3点、螺髪3点、不明土製品4点が出土している。特に、螺髪と不明土製品については二次焼成を受けた状況が認められ、建物が焼失したことを推測させるものである。

以上のことから、東方建物の存在を確定するにあたっては今後に残された課題は多く、より厳密に検討する必要がある。その意味で、1999年度に本調査区北側で実施予定の調査は極めて重要である。

(註1) 坪井清足『河内新堂烏舎寺』1961 大阪府教育委員会

(註2) 北野耕平『河内新堂廃寺』1960 大阪大学

(註3) 藤澤一夫『百済王氏と百済寺講演資料』1990 (財) 枚方市文化財研究調査会

SH98

調査地：富田林市緑ヶ丘町1603-1

調査面積：85㎡

1. 基本層序

調査区の基本層序は、上から順に盛土、耕土（第1層）、2.5Y R 4 / 4 褐色土（第2層）、2.5Y 5 / 3 黄褐色土（第3層）、10Y R 5 / 6 黄褐色粘質土（第4層）、2.5Y 5 / 2 暗灰黄色混砂弱粘質土（第5層）、10Y R 4 / 3 にぶい黄褐色混砂粘質土、10Y R 3 / 1 黒褐色粘質土、10Y R 5 / 6 黄褐色砂質土、5 Y 5 / 1 灰色粘質土と5 Y 5 / 1 灰色粘土で構成される（第6層）。調査区の北東端部では床土（第2層）直下地山である。

2. 遺構

遺構は、第6層の上面と下面の2面で検出した。

《第1面》

検出した遺構には、ピット3、土坑9、溝3がある。溝のうち、1及び3については、他の遺構の埋土と違ってほぼ共通すること、推定伽藍中軸線に平行すること、共通して南壁から約1.5m地点でとぎれること、出土遺物に新しい時期のものが認められないことから、参道に伴う溝と推定される。溝間は約2.7mを測る。

溝 1

調査区の中央部南端で検出した南北方向の溝である。南壁での幅は0.34m、深さは0.08mを測る。長さ1.5m分を検出した。にぶい黄色粘質土の埋土で、土師器、瓦片を含む。

溝 2

調査区の中央部で検出した南北方向の溝である。幅は最も広いところで2.9m、深さは0.2mを測る。長さ6.7m分を検出した。上層が暗灰黄色弱粘質土、下層が暗灰黄色弱粘質土に明黄褐色粘質土がブロック状に混じる埋土で、土師器、須恵器、黒色土器、瓦器、瓦片を含む。

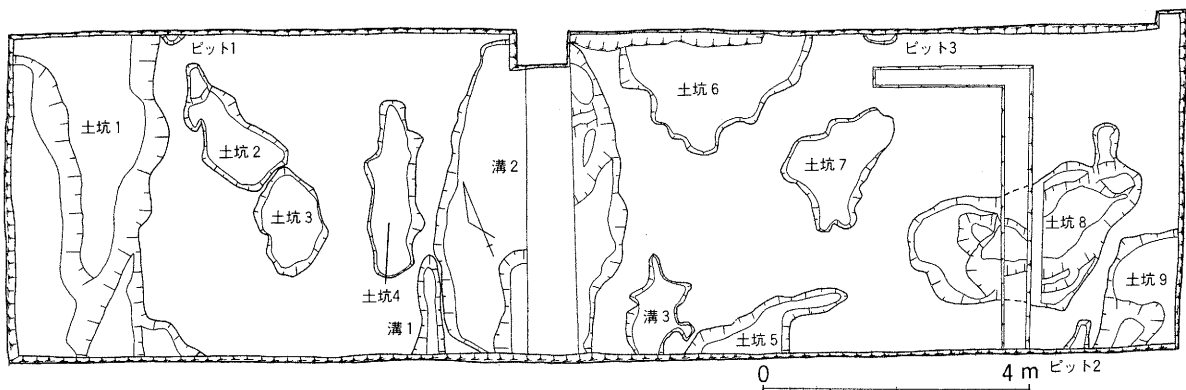
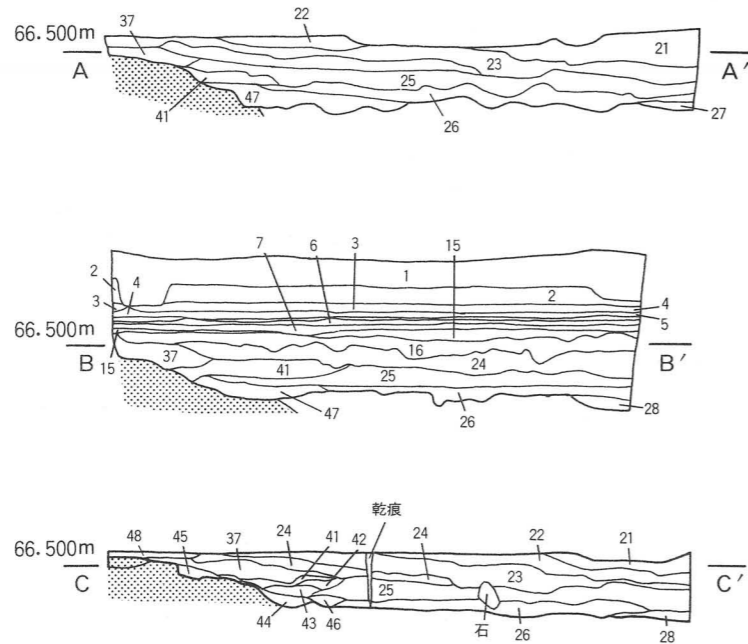
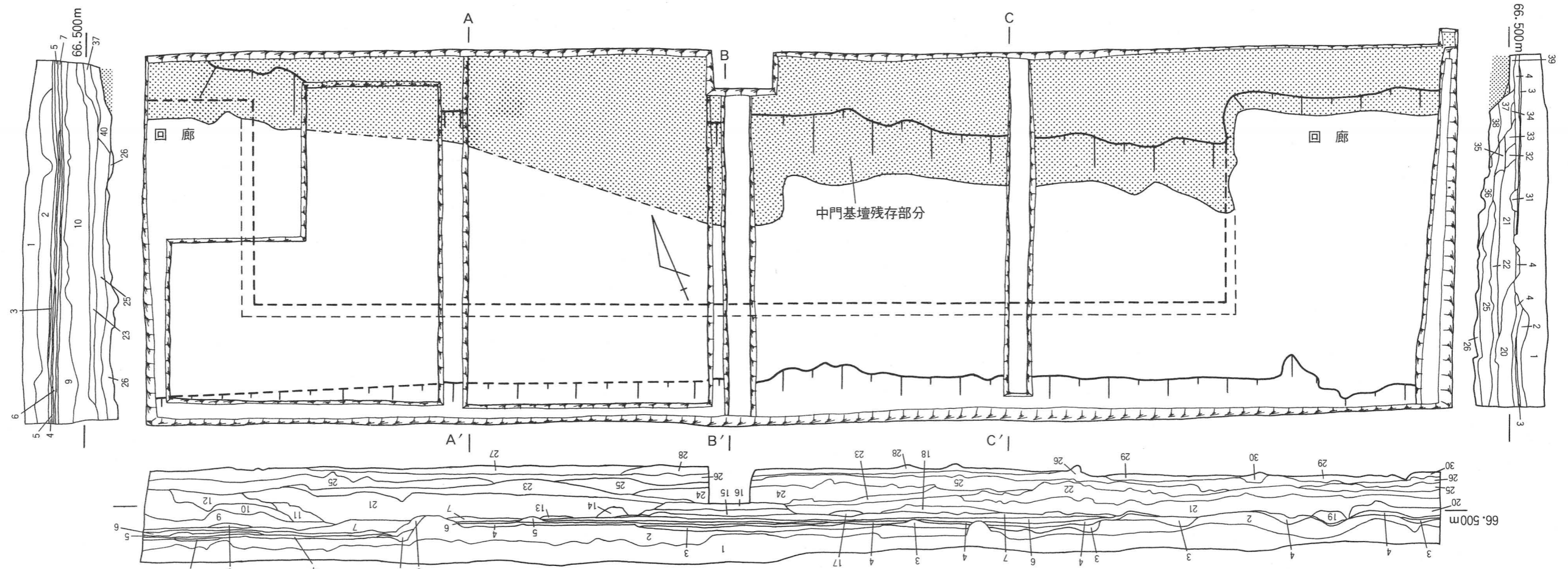


図15 遺構平面図（第1面）



- | | |
|---|---|
| 1. 盛土(府営住宅建設時の整地土) | 25. 5 Y 5/1 灰色粘質土 |
| 2. N14 暗灰色土 | 26. 5 Y 5/1 灰色粘土 |
| 3. 2.5 Y 6/1 黄灰色土 | 27. 5 Y 4/1 灰色粘土に10 Y R 5/8 黄褐色砂質土がブロックに混入 |
| 4. 7.5 Y R 4/4 褐色土 | 28. 10 Y R 2/1 黒色粘土 |
| 5. 2.5 Y 5/3 黄褐色土 | 29. 10 Y R 6/6 明黄褐色砂質土 |
| 6. 10 Y R 5/6 黄褐色弱粘質土 | 30. 10 Y R 6/6 明黄褐色粘土と5 Y 5/1 灰色粘土が混入 |
| 7. 2.5 Y 5/2 暗灰黄色弱粘質土にマンガン・白色砂含む | 31. 2.5 Y 5/3 黄褐色土 |
| 8. 5 Y 5/2 灰オリーブ色砂質土 | 32. 10 Y R 4/4 褐色粘質土 |
| 9. 10 Y R 5/2 灰黄褐色粘土 | 33. 10 Y R 4/3 にぶい黄褐色粘質土 |
| 10. 10 Y R 6/3 にぶい黄橙色弱粘質土 | 34. 10 Y R 4/6 褐色粘質土 |
| 11. 10 Y R 5/8 黄褐色弱粘質土 | 35. 10 Y R 3/2 黒褐色粘質土 |
| 12. 10 Y R 5/4 にぶい黄褐色砂質土 | 36. 5 Y 5/1 灰色粘質土に灰片混入 |
| 13. 2.5 Y 5/2 暗灰黄色弱粘質土 | 37. 10 Y R 7/1 灰白色砂 |
| 14. 2.5 Y 6/3 にぶい黄色粘質土 | 38. 7.5 Y R 5/2 灰褐色粘質土に10 Y R 6/6 明黄褐色粘質土がブロックに混入 |
| 15. 2.5 Y 5/2 暗灰黄色弱粘質土 | 39. 10 Y R 6/6 明黄褐色粘質土にマンガン含む |
| 16. 2.5 Y 5/2 暗灰黄色弱粘質土に10 Y R 6/8 明黄褐色粘質土がブロックに混入 | 40. 10 Y R 3/2 黒褐色粘質土 |
| 17. 2.5 Y 6/3 にぶい黄色粘質土 | 41. 10 Y R 5/2 灰黄褐色砂質土 |
| 18. 2.5 Y 6/1 黄灰色粘質土 | 42. 5 Y 5/1 灰色砂質土 |
| 19. 2.5 Y 6/1 黄灰色粘質土 | 43. 10 Y R 5/1 褐灰色砂 |
| 20. 2.5 Y 7/2 灰黄色弱粘質土 | 44. N41 灰色砂質土に10 Y R 5/6 黄褐色粘質土がブロックに混入 |
| 21. 10 Y R 4/3 にぶい黄褐色粘質土 | 45. 7.5 Y R 5/2 灰褐色砂質土に10 Y R 6/6 明黄褐色粘質土がブロックに混入 |
| 22. 10 Y R 3/1 黒褐色粘質土 | 46. 10 Y R 5/2 灰黄褐色砂質土 |
| 23. 10 Y R 5/6 黄褐色砂質土 | 47. N31 暗灰色粘質土に10 Y R 6/6 明黄褐色粘質土が混入 |
| 24. 10 Y R 3/1 黒褐色粘質土 | 48. 2.5 Y 7/2 灰黄色弱粘質土 |



図16 遺構平面・断面図(第2面)

溝 3

調査区の中央部南端で検出した南北方向の溝である。幅は最も広いところで1m、深さは0.07mを測る。長さ1.5m分を検出した。にぶい黄色粘質土の埋土で、土師器、瓦片を含む。

遺構名	形状	規模(m)	深さ(m)	土 色	遺 物
ピット1	不整形	0.37 × (0.16)	0.080	黄灰色粘質土	瓦細片
ピット2	不整形	(0.44) × 0.40	0.085	灰黄色弱粘質土	
ピット3	不整形	0.52 × (0.13)	0.045	黄灰色粘質土に灰褐色粘質土がブロック状に混入	
土坑1	不整形	(4.86) × (2.92)	0.385	上層 灰黄褐色粘土 下層 にぶい黄橙色弱粘質土	土師器・須恵器・黒色土器 瓦器・瓦片 土師器・須恵器・黒色土器 三彩・轆の羽口・焼土魂・瓦片
土坑2	不整形	1.43 × 0.80	0.100	暗灰黄色弱粘質土	土師器・瓦細片
土坑3	不整形	1.66 × 1.00	0.105	暗灰黄色弱粘質土	土師器・須恵器・瓦細片
土坑4	不整形	2.67 × 0.86	0.125	暗灰黄色弱粘質土	土師器・須恵器・瓦片
土坑5	不整形	(2.36) × 0.85	0.110	黄灰色粘質土	土師器・須恵器・黒色土器 瓦片
土坑6	不整形	2.63 × (1.86)	0.105	灰黄色弱粘質土	土師器・須恵器・瓦片
土坑7	不整形	1.72 × 1.53	0.060	黄灰色弱粘質土	土師器・須恵器・瓦片
土坑8	不整形	3.72 × 1.95	0.315	上層 黄灰色弱粘質土 下層 灰黄褐色粘質土	土師器・須恵器・黒色土器 サヌカイト・瓦片 土師器・須恵器・轆の羽口 鉄滓・瓦片
土坑9	不整形	(1.22) × (1.24)	0.210	灰黄色弱粘質土	土師器・須恵器・瓦片

表3 ピット・土坑一覧表

《第2面》

最終の地山面である。検出した遺構は中門とこれに取り付く南面回廊の一部である。

中 門

東半部を全面的に掘り下げて検出した。調査区北東部では、側溝掘削時に床土直下で地山面が確認され、地山を削り出したと推定される東西から南北方向に直角に曲がる段差が判明し、下層遺構の存在が大いに期待された。しかしながら、遺構の残存状況は極めて悪く、南に張り出す基壇の一部が確認できたのみである。残存する基壇南側は、正面に向かって緩やかに傾斜している。全体にわたって削平を受けていて、東辺部で約1.5mの長さを残しているのみで、西辺部では全く確認されなかった。斜面の表面は、凹凸が激しく、なだらかさは認められない。北壁付近で平坦面が見られるが、西側にいくにしたがって幅が狭くなり、調査区の北西隅では平坦面はほとんど見られない。残存する基壇面が地山であることから、南へ次第に下がる地勢に応じた斜面になると思われる。おそらく、この地山上に基壇土が築成されていたと推定されるが、何らかの要因で整地の際に削り取られたのであろう。最も残りのよい南面東回廊取付部分での基壇の高さは約0.4mである。礎石の痕跡等は、残念ながら確認できなかった。

伽藍推定中軸線から基壇東辺裾までの距離が約6.7mであることから、東西幅は約13.4mと推定される。

調査区南壁沿いには中軸線に直行して東西方向に深さ0.07mの段差が認められる。中門前面は東端部では地山面であるが、中央付近から以西では旧谷地形に堆積した砂層の上に砂混じりの粘土層が面となっていて、基盤面構築の際の境を示すものと推定される。

前面では約0.3mの河原石が点在するものの基壇化粧に使用されたものかはわからない。東辺から南面東回廊取付部分の地山を削り出した基壇裾でも、若干の凹凸はあるものの、明瞭な基壇化粧の痕跡は認められなかった。正面部分では雨落溝などの施設は一切確認できなかった。南側が谷地形に伴う低湿地であったことから、当初から雨落溝は存在しなかった可能性も充分考えられる。

基壇前面及び基壇上面付近からは飛鳥時代の軒丸瓦が多く出土している。

回 廊

中門に取り付く南面回廊の南辺基壇の一部が確認できた。中門から発した東回廊の3m分と西回廊の1.4m分である。南辺からわずかに0.6m検出したのみで、礎石の痕跡等は確認できなかった。東回廊では床土直下で基壇面が現れ、約0.4mの基壇の高さが残っていることから、もとは0.4m以上あったと思われるが、現状は削られている。基壇構築にあたって地山を水平にした後、黄褐色粘質土を積んでいる。

基壇前面には中門同様に雨落溝などの施設は確認できなかった。

3. 遺 物

1998年度の調査では、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、垂木先瓦、鴟尾、隅木蓋瓦などの瓦類、須恵器、土師器、三彩、黒色土器、瓦器、染付などの土器類や陶磁器類、鞆の羽口などの土製品、サヌカイト製打製石器、剥片、砂岩、凝灰岩などの石類のほか、ガラス製玉、鉄片、銅製品、焼粘土塊などが遺物整理箱（内寸46.5cm×30cm×13.6cm）に合わせて約243箱分出土している。これらのうち約229箱分が瓦類で、4箱分が土器類、10箱分が石類、1箱分が土製品である。その他の遺物は合わせても1箱に満たない。瓦はその約7割が整地層からの出土である。また、他の遺物も同じく整地層からの出土が圧倒的に多い。整理途中であることから、本格的な報告は来年度に行うことにして、ここでは軒瓦だけを取り上げ、その出土点数を示しておきたい。

1) 軒丸瓦・軒平瓦

今回の調査で出土した軒瓦を分類した結果、軒丸瓦10～11形式、軒平瓦2形式を確認できた。ここでも1997年度の報告と同じく井西の分類^(註1)に従ってその点数を記述する。

軒丸瓦 (図17・18)

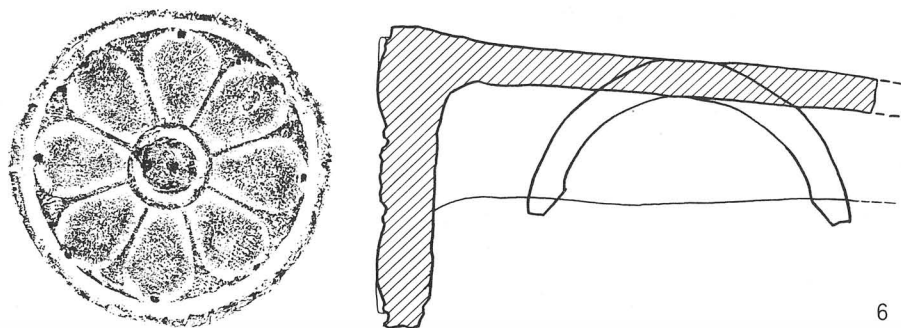
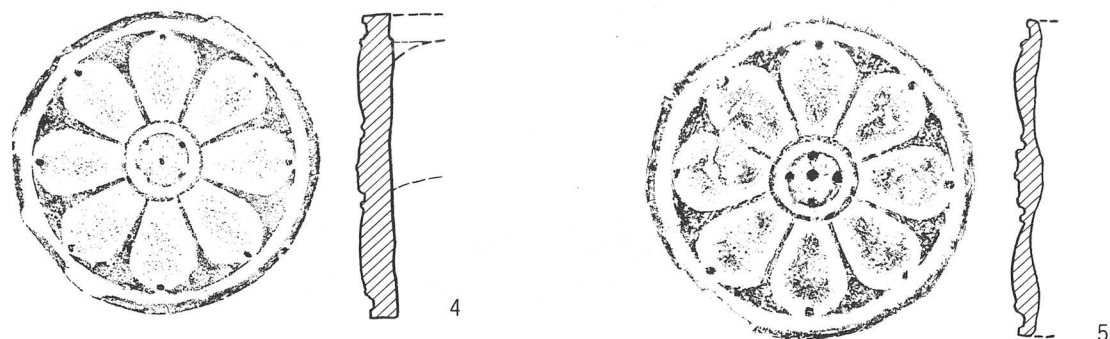
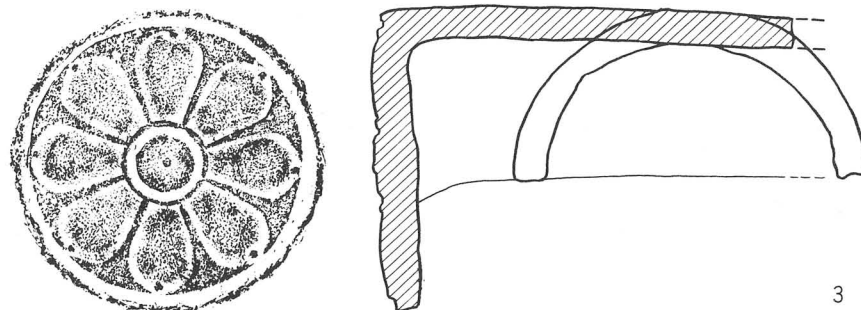
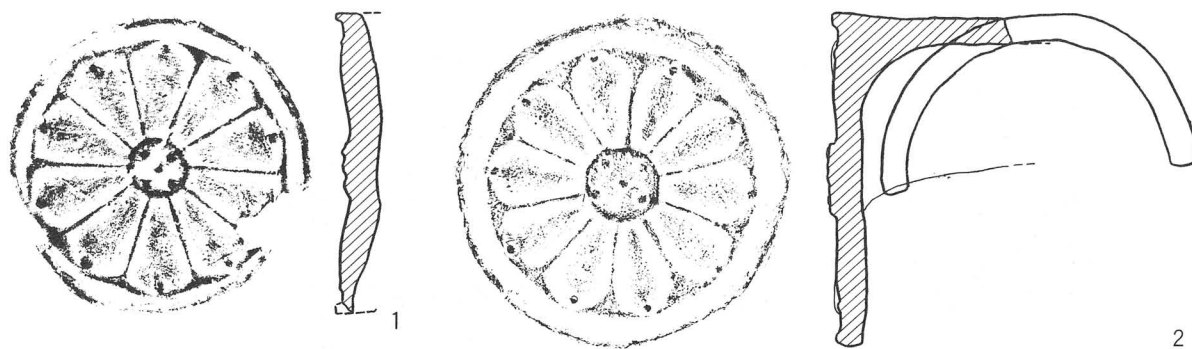
IA01形式? (素弁9弁蓮華紋軒丸瓦) ……1点、中房欠失のため垂木先瓦と区別できない。

IA02形式 (素弁8弁蓮華紋軒丸瓦) ……11点

IA03形式 (素弁8弁蓮華紋軒丸瓦) ……10点

IA04形式 (素弁10弁蓮華紋軒丸瓦) ……4点

IA05形式 (素弁10弁蓮華紋軒丸瓦) ……5点



0 20cm

图17 軒丸瓦

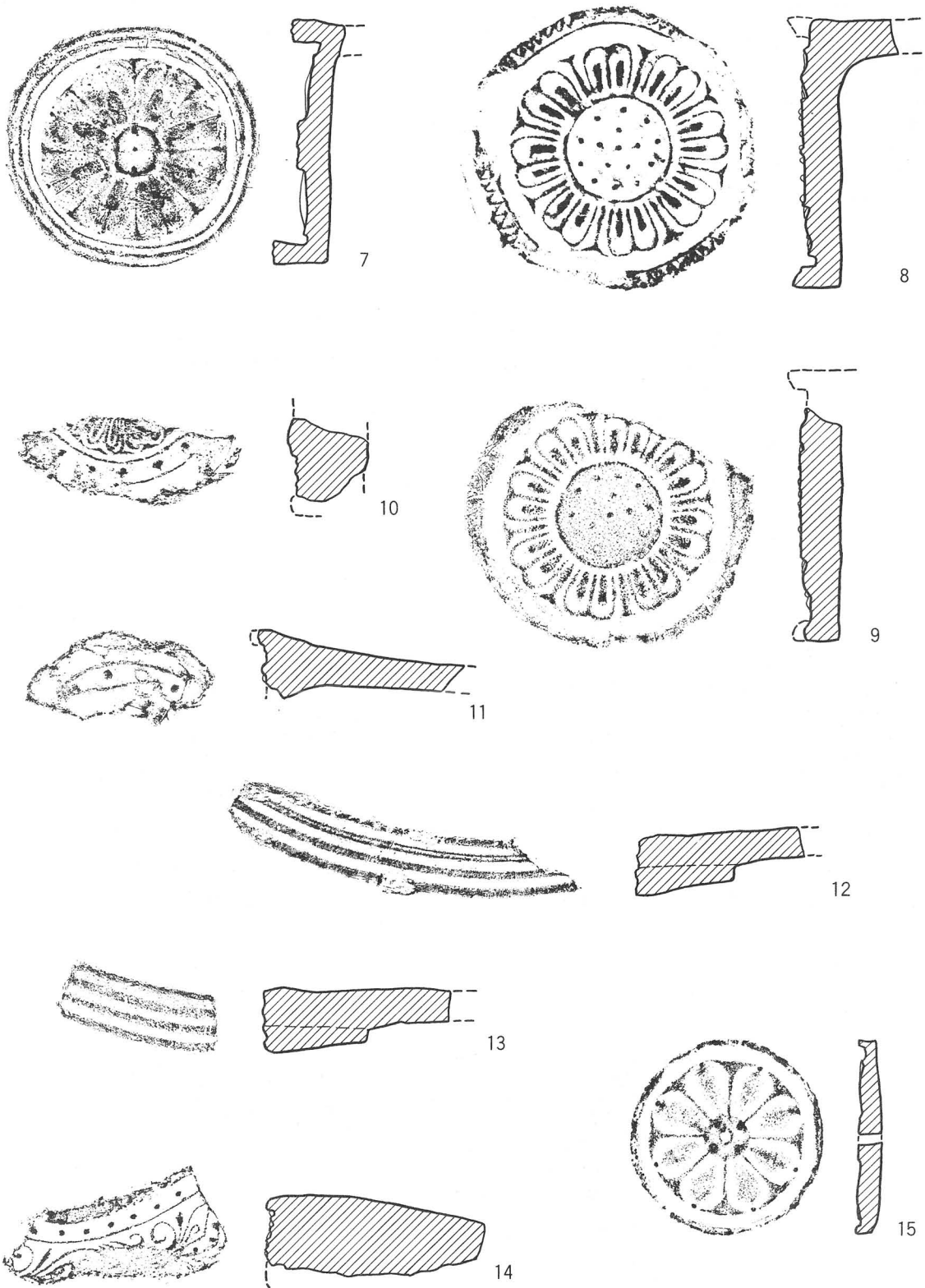


图18 軒丸瓦・軒平瓦・垂木先瓦

- I A 1 3 形式（素弁10弁蓮華紋軒丸瓦）…… 1 点
II A 0 6 形式（単弁 8 弁蓮華紋軒丸瓦）…… 7 点
II A 0 7 形式（単弁 8 弁蓮華紋軒丸瓦）…… 3 点
II A 0 8 形式（単弁 8 弁蓮華紋軒丸瓦）…… 2 点
II A 0 6～II A 0 8 形式（単弁蓮華紋軒丸瓦）…… 4 点、外縁の三重の圈線だけ残存のもの。
II A 0 9 形式（複弁 8 弁蓮華紋軒丸瓦）……11点
II A 0 9～II A 1 0 形式（複弁 8 弁蓮華紋軒丸瓦）…… 9 点、外縁の面違鋸歯紋もしくは複弁部分のみ残存のもの。
IV A 1 2 形式（複弁蓮華紋軒丸瓦）…… 6 点

軒平瓦（図18）

- II B 0 1～II B 0 2 形式（四重弧軒平瓦）……70点
IV B 0 3 形式（均斉唐草紋軒平瓦）…… 3 点

4. まとめ

今回の調査は寺域南側の状況確認を主な目的に、大阪府教育委員会と合同で範囲確認調査を実施した。以下、各トレンチ調査の概要を記す。

《北方トレンチ》

創建時の南面東回廊の基壇南辺の延長部を検出。中門取付部から東に約19.5m地点で、南北方向に延びると思われる落ちがあり、これより以東には延びないと想定される。基壇の高さは約0.4mである。西半部では幅約0.8mの犬走り認められる。礎石等の痕跡は検出されなかったため、建物の構造はわからない。基壇化粧の痕跡が全くなかったことから、当初からなかった可能性も考えられる。

また、その後、再建のため整地された堆積層上面では、基壇は削平されて残っていなかったが、廃絶時に落下したと思われる大量の瓦が残っていた。平城宮式軒瓦を含むことから、その後、平安時代に瓦を葺き替えることなく、何らかの要因で倒壊したことが窺える。寺域北方の調査では、寺院造営氏族の集落跡が検出されており^(註1)、9世紀後半までの建物跡が確認されていることを考え合わせると、新堂廃寺の廃絶時期を考える上で重要である。

《北西トレンチ》

寺域北西で検出された寺域西限を画すると推定される溝の延長部を確認するために設定された。調査の結果、南北方向の溝は検出されなかったが、一帯が谷地形であったことが判明した。

《中央トレンチ》

市教委が設定した調査区に続く、推定伽藍中軸線に沿った南北に長い調査区である。北半部では、整地層上面で推定中軸線の両側に平行する溝間2.5～3.0mを測る2条の溝が検出された。他の遺構に比べ、新しい時期の遺物を含まないことなどから、参道の両脇に掘られた側溝と考えられる。

さらに、南半部の安定した地山面では桁行3間、梁間2間の東西棟の掘立柱建物の構造を持つ南門が整備されたことが判明した。中央間約3.0m、脇間約2.4m、梁間約2.1mである。中通りの掘方すべてに、鴟尾片を礎板代わりに使用されていた。基壇は東西幅約13.4m、南北幅約8.2mであったと推定され、築地塀が取り付くことも確認された。南門の南西隅では、廃絶時の瓦が崩落した状況で出土した。

南門前面には、建物と平行する宝幢遺構と推定される約3.3mの間隔で6本の柱の掘方が存在することも判明した。

南門が建立される以前には、正面基壇の下に建物と平行する幅約2m、深さ約0.7mを測る東西溝が存在することが判明した。おそらく、寺域南限を画する溝として機能していたと考えられ、新堂廃寺造営にあたって、南門建立を予定に入れた寺域確定がなされていたことが窺える。この段階では、南門と中門との間に谷地形が存在し、低湿地を形成していたことがわかった。

《西方トレンチ》

中央トレンチで検出した東西溝の延長が確認された。

《東方トレンチ》

中央トレンチで検出した東西溝の延長が確認され、確実に直線上に延びることが判明した。

以上、範囲確認調査における各調

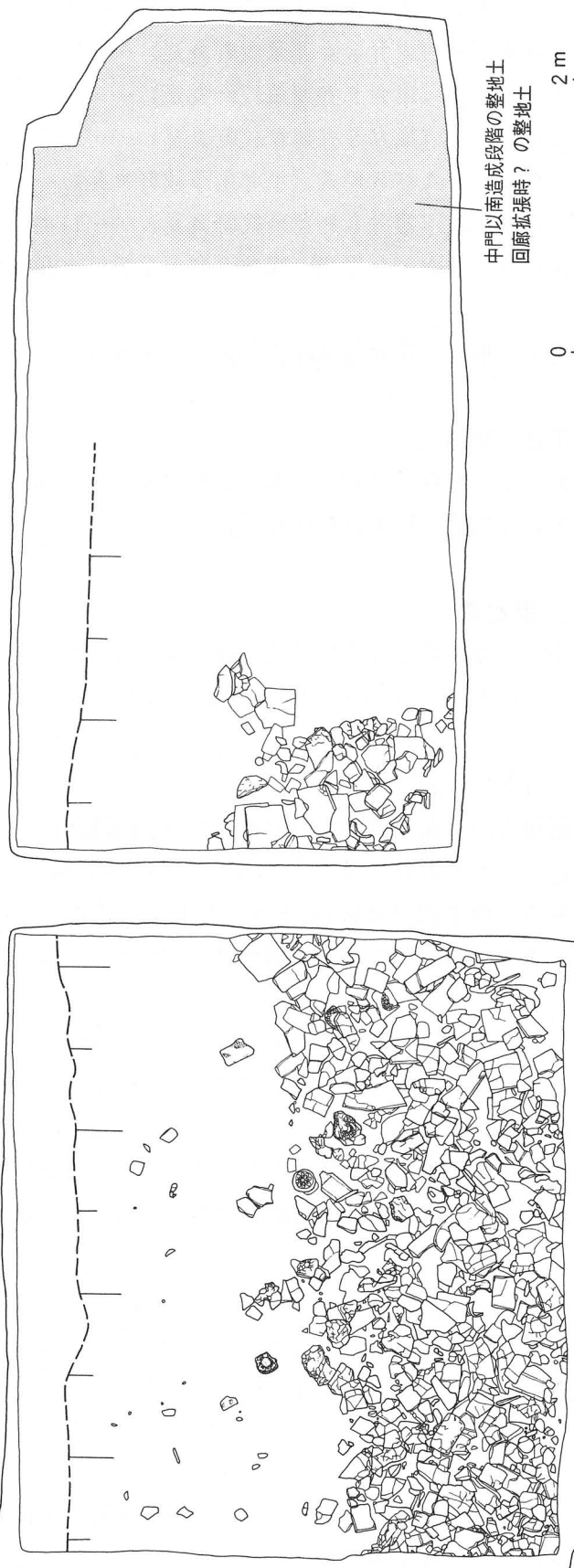


図19 回廊廃絶状況（北方トレンチ）

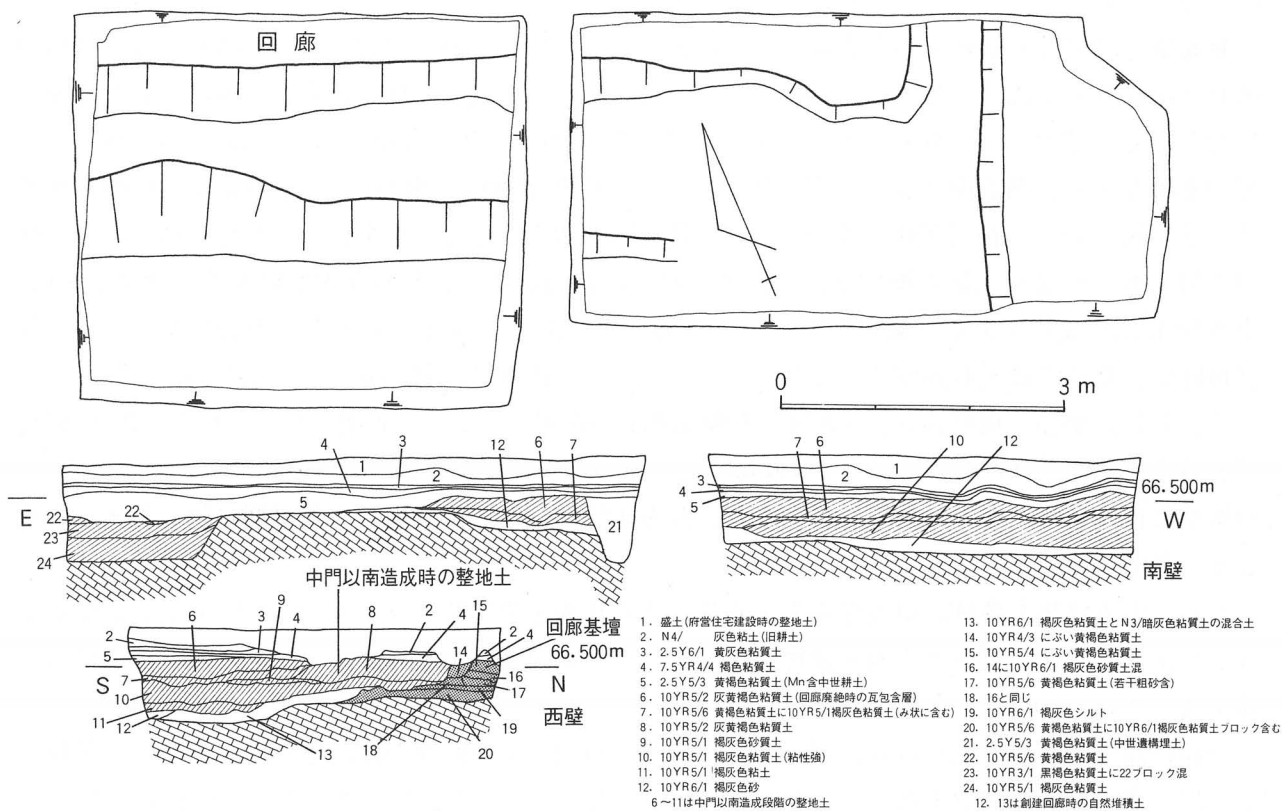


図20 回廊創建平面・断面図(北方トレンチ)

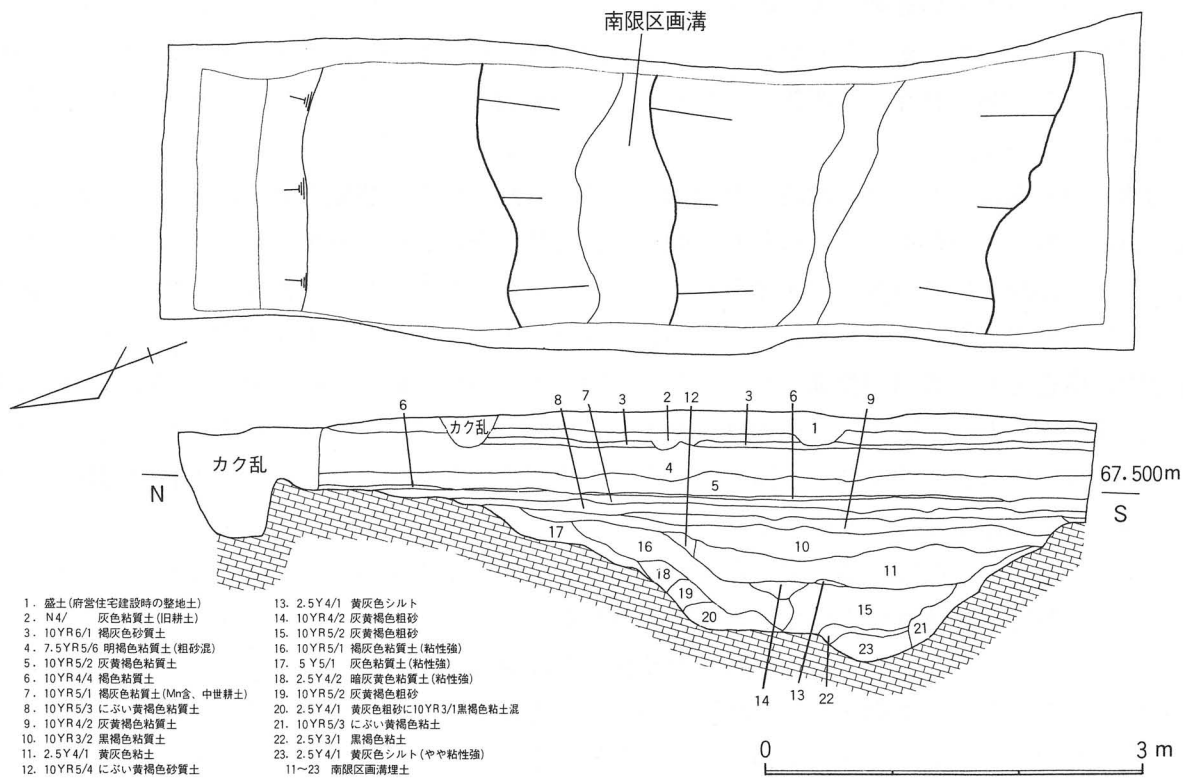


図21 西方トレンチ平面・断面図

査区の調査成果を記した。これらの成果を踏まえ、まず、新堂廃寺の伽藍配置について考察を試みることにする。

新堂廃寺における初めての調査は、今から約40年前の1959・60年に遡る。この調査では、遺構の残存状況は極めて悪く、わずかに十数センチの基壇基底部を残す4棟の建物跡が確認された。南北に配した南方建物・中央建物・北方建物と西方建物である。南方建物は、一辺13.35mを測る正方形の基壇をもち、西辺南半で玉石列が残っていた。中央建物は、東西15.9m、南北14.1mの東西棟で、基壇最下底に玉石列が残っていた。北方建物は、東西24.2m、南北15mと考えられ、南辺と西辺の肩にわずかな凝灰岩の据付痕跡が認められた。西方建物は、瓦積基壇痕跡をもつ南北27.6m、東西16.42mの建物である。東辺中央に間口5.6m、奥行3.2mの突出部があり、南辺では凝灰岩の据付痕跡が、北辺では玉石列が認められた。さらに、この建物は、北に0.4m、南に3.36m拡張されていて、南北31.36m、東西16.5mの東面する前進建物が存在したことも判明した。これらの建物跡は、飛鳥時代に創建されたものではなく、飛鳥時代の瓦のみを含む整地層の上面に建てられたことから、白鳳期に再建されたものであること、また、西方建物は、その後焼失し、天平期に建て替えられたことも判明した。

当時、南方建物を塔跡、中央建物を金堂跡、北方建物を講堂跡とみる南向きの四天王寺式伽藍配置を想定されたが、東面する西方建物を重要視すると東向きの川原寺式とも想定され、確定には課題を残していた。

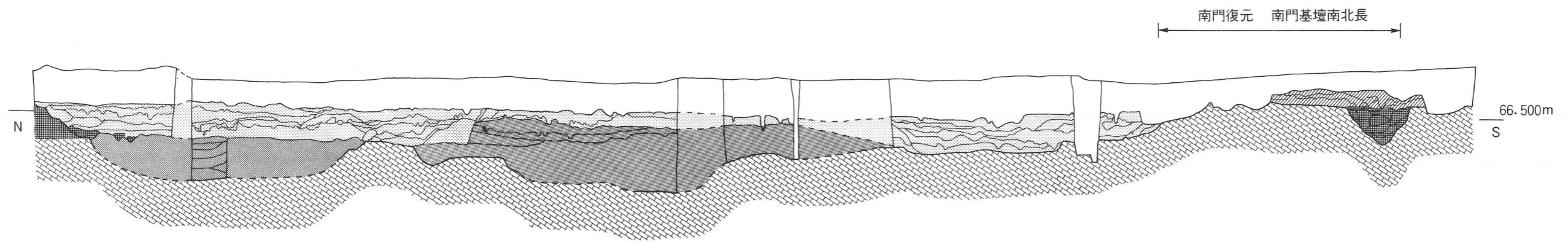
今回の調査で初めて飛鳥時代に溯ると想定される中門と南面回廊が確認されたことから、創建時は中門・塔・金堂・講堂を南北に一直線上に配置した「四天王寺式」であったことが判明した。

創建時の中門前面に近接して、谷地形に伴う低湿地であったことを証明する泥層の堆積が認められることから、本来の伽藍聖域への入り口としての機能を有していたとは考えがたく、形式的な意味合いをもった中門であったと想定される。新堂廃寺の周辺地形を観察すると、北側は西方のオガンジ池からの谷筋が存在し、西側には羽曳野丘陵の裾部が間近に迫っていて、東方に開けた地形であることがわかる。

創建時の建物は、元々南に傾斜した地形上に建てられていたと想定される。その後、大規模な造成工事が行われ、伽藍中心部では北側を削平し、南側を埋め立てて整地をした後に平坦地を形成したことが、1959・60年の調査で確認されている。今回の調査地一帯も、創建時の地表面を広範囲にわたって川原寺式軒瓦を含む整地土で埋め立てられ、中門から約35m南側の安定した地山面に掘立柱建物の構造をもつ南門が整備されたことが判明した。桁行3間、梁間2間の東西棟で、中央間約3.0m、脇間約2.4m、梁間約2.1mの構造である。基壇は、東西約13.4m、南北8.2mと想定される。東西幅については、中門及び塔と同一である。中央間の南北6本の柱穴には、礎板に鴟尾が転用されており、1個体を分割して使用されていた。

さらに、南門と中門間には推定伽藍中軸線に平行する2条の溝が存在することから、参道側溝と考えられ、参道が整備されていたことが想定される。

このように、南門を完成させ、伽藍を再整備した段階では、西方に東面する南北棟の建物が配置されていることから、南面する伽藍配置であったことはまちがいないが、これを広い意味での四天王寺式の範疇にとらえるのか、変則的な一面が生じる。さらに、1997年度に検出した基壇上の高まりを東方建物と想定すれば、新堂廃寺は、独特の伽藍配置をもつとみることも可能である。また、



- 創建当初の遺構・中門基壇土
- 南門基壇土
- 地 山
- 谷地形埋土
- 中門・南門間の整地土

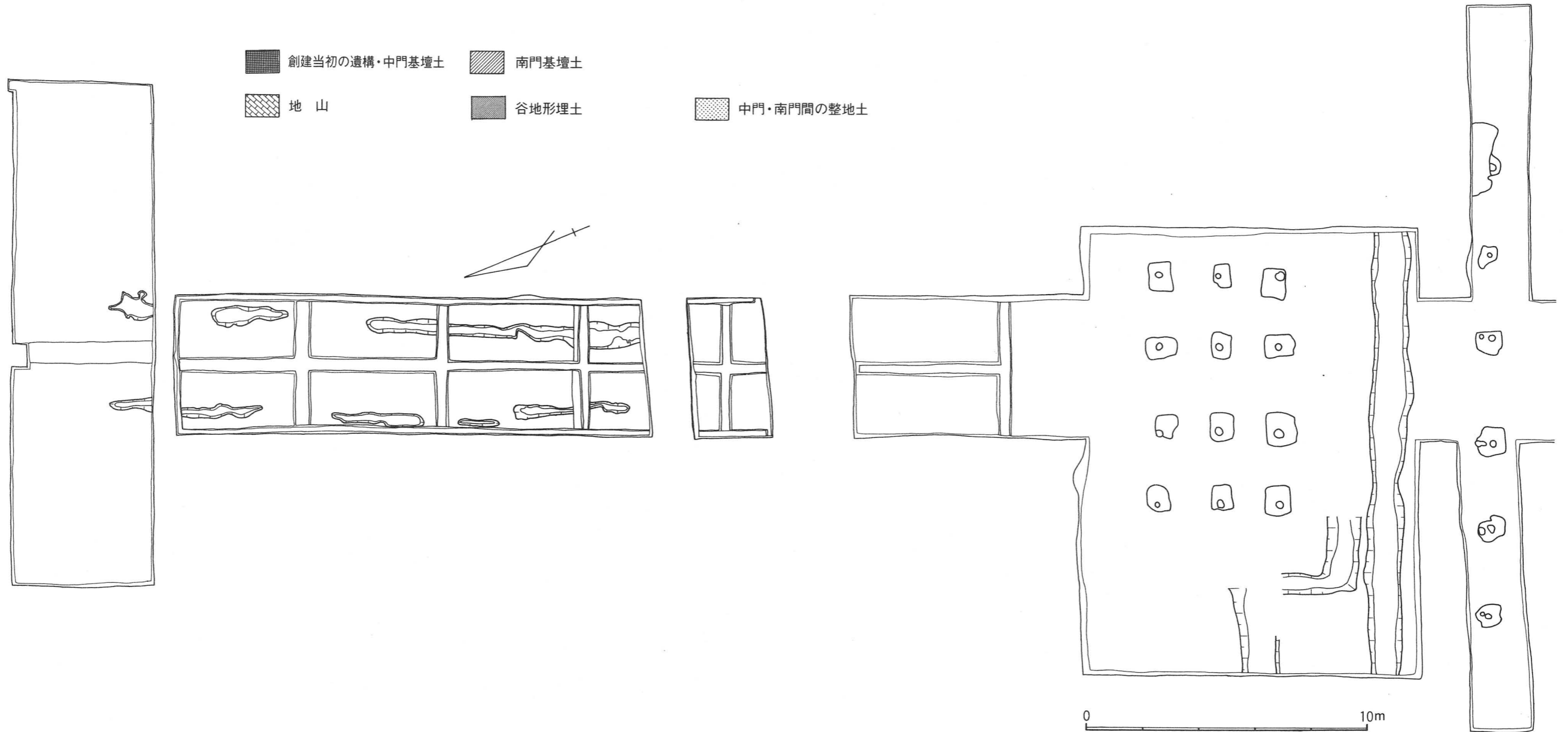


図22 南門造営後の遺構面および中門・南門間整地状況断面図

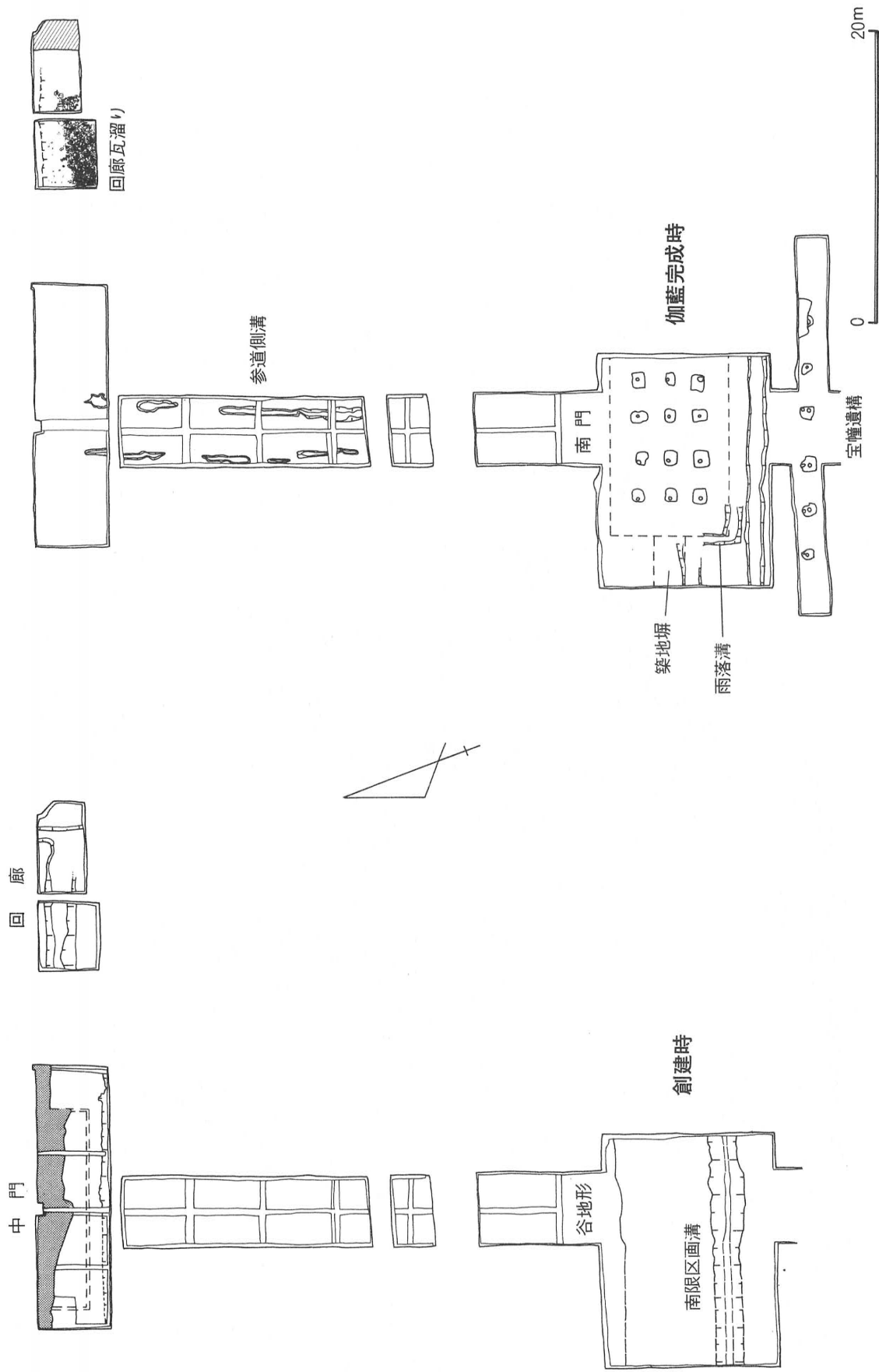


図23 遺構変遷図

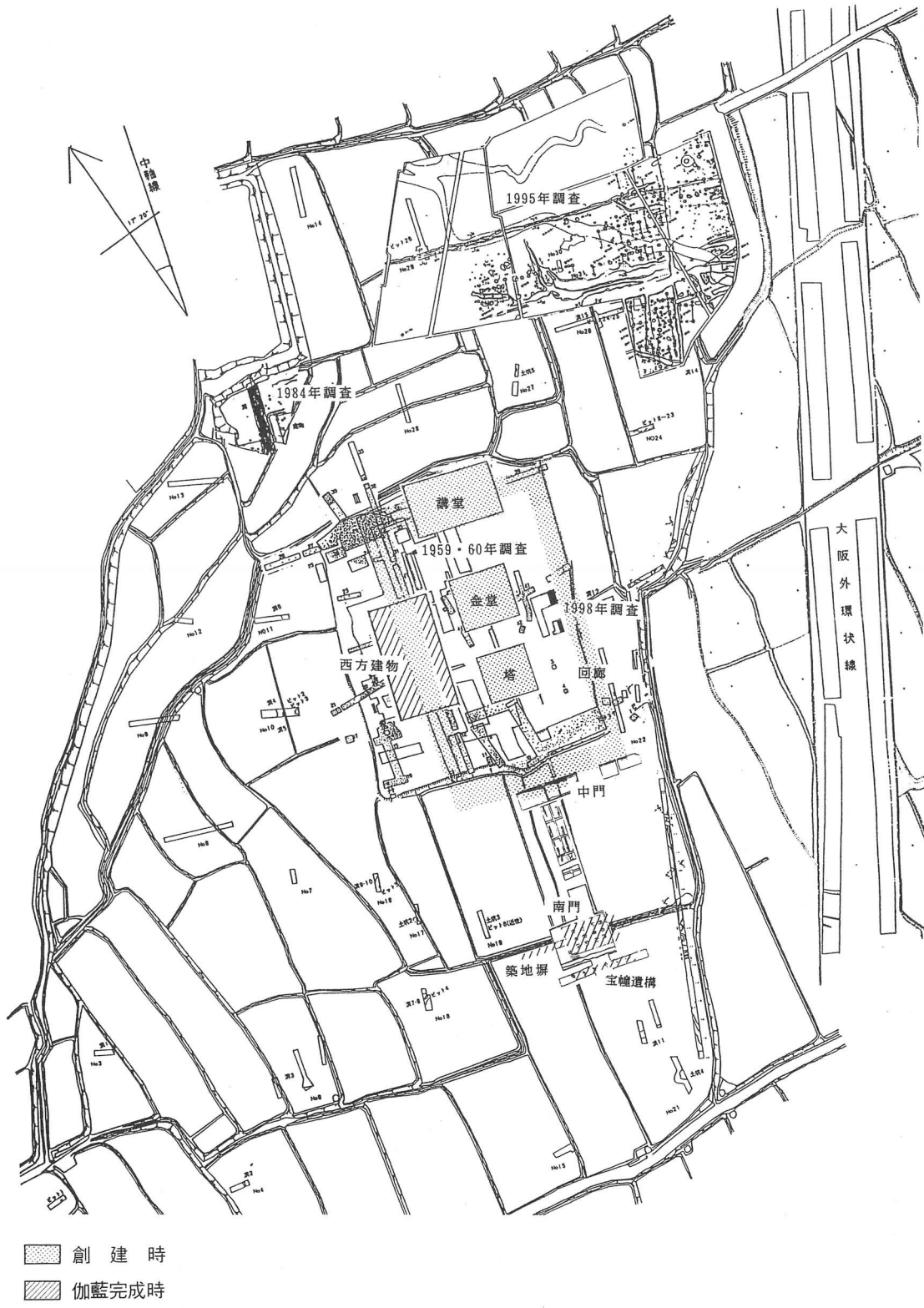


図24 伽藍復元図

南面回廊は、再建に際して東方に拡張された事実が窺えることも注目される。

つぎに、南門基壇下で検出した東西溝について考える。この溝は、幅約2m、深さ約0.7mを測り、断面が緩やかなU字形を呈する。推定伽藍中軸線に直行して東西に延びることから、明らかに自然地形に沿って蛇行する自然流路とは区別される。おそらく、新堂廃寺造営に際して、寺域の南限を画する溝として機能していたと推定される。このことは、寺院造営当初から南門建立を視野に入れて、伽藍の建設に着手したことを物語るものである。1993年に実施された府営住宅建て替えに先立つ範囲確認調査で、新堂廃寺の寺域を東西約1町、南北約2町と推定されたが、この

溝を南限に求めることができる。いま北限の東西溝を検討すると、1995年の大阪府教育委員会で検出されている溝01が北約2町の位置に該当することになる。西限については、1984年に実施した富田林市教育委員会の調査で検出した南北溝が該当すると想定される。^(註2) 東限については、これらの成果を踏まえ、今後の調査で確認されることが期待される。

最後に、新堂廃寺の造営についてふれてみる。新堂廃寺の軒瓦は、百済文化の影響を色濃く残していることについては、従前から周知されている。飛鳥寺・法隆寺・四天王寺と同紋の軒瓦をはじめ、最近の調査では、飛鳥寺同範の垂木先瓦も^(註3)出土しており、これらの寺院の造営に関わった瓦工人との強い結びつきが窺え、造営氏族が中央政権と密接な関係があったことを物語っている。

新堂廃寺の北西には、寺名を推測させる「オガンジ池」があり、百済の扶余にある四天王寺式伽藍配置をもつ「烏舎寺」^(註4)と結びつけるならば、より百済的色彩の強さを感じさせる。また、池の北西方の丘陵上には、新堂廃寺の檀越を被葬者と想定できる横口式石棺をもつお亀石古墳が立地する。あたかも丘陵上から廃寺を見下ろす位置にあって、石棺の周囲には櫛室状に新堂廃寺と同種の飛鳥時代平瓦が積まれており、百済文化の影響が強くあらわれていることも見逃せない。

今回の調査で、南門の前面に宝幢遺構が存在すること、さらに、伽藍整備にあたって、中門と南門間の谷地形を大規模に造成することが可能な財力を有していたことなどを考え合わせると、一在地豪族よりも一段格の高い、中央政権の強力な援助が受容可能な造営氏族を視野に入れなければならない。このようにみると、中央政権にとって、摂津の四天王寺に対する河内の新堂廃寺という重要な拠点施設としての位置づけがなされていたことを裏付けるものである。

(註1) 井西貴子『新堂廃寺発掘調査概要』1996 大阪府教育委員会

(註2) 中辻亘『新堂廃寺現地説明会資料』1984 富田林市教育委員会

(註3) 花谷浩『奈良国立文化財研究所年報1997-I』1997 奈良国立文化財研究所

(註4) 最近の調査で、創建瓦が6世紀末まで遡ることが指摘されている。

大阪府教育委員会広瀬雅信氏のご教示による。

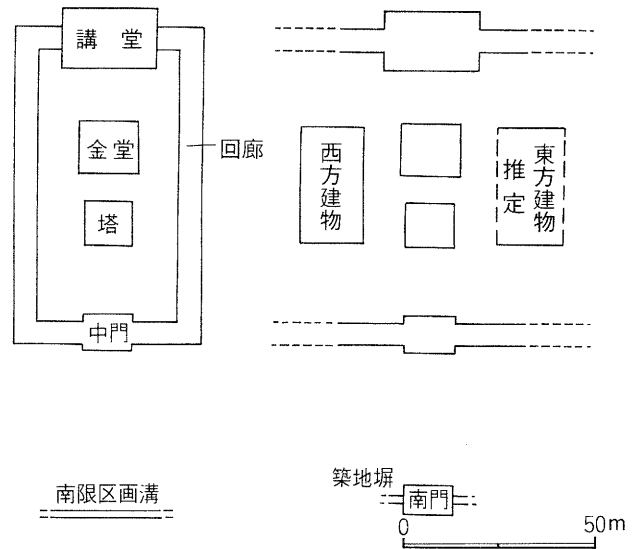


図25 伽藍変遷図

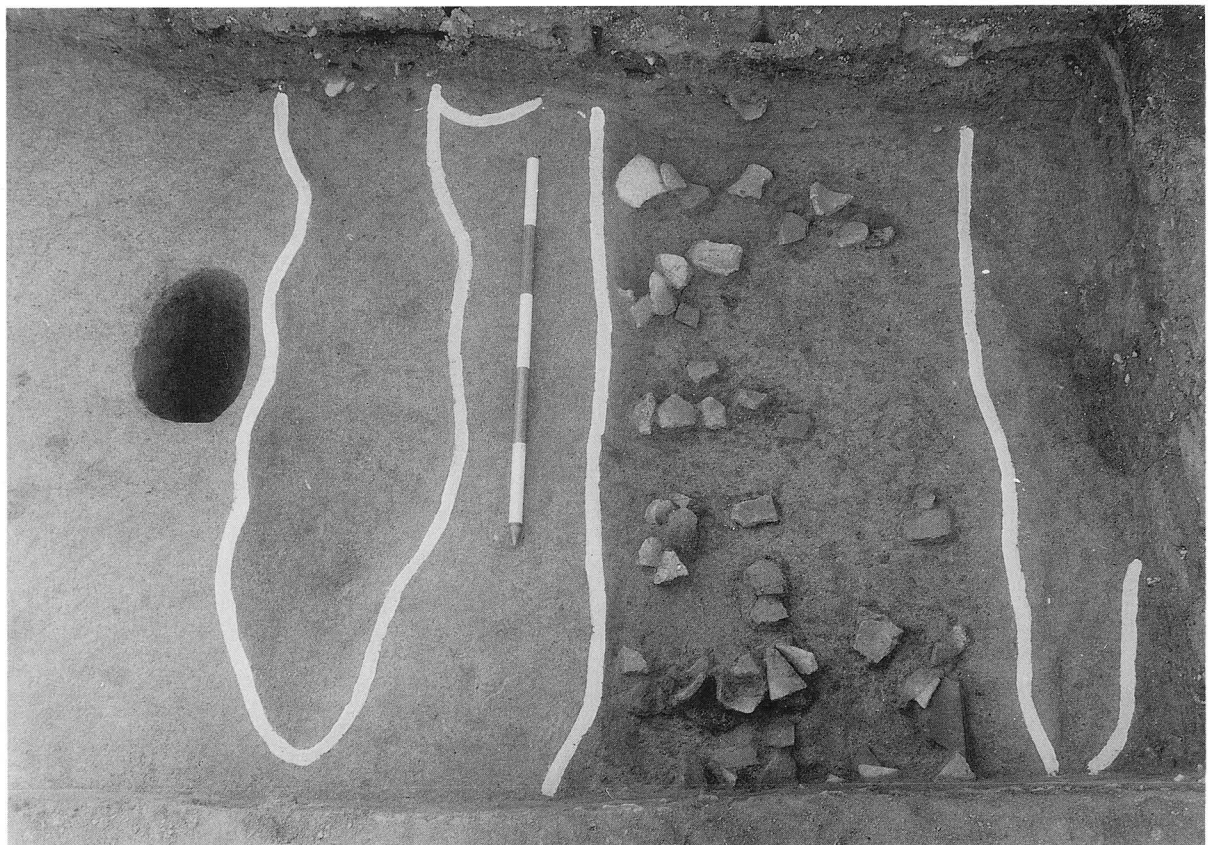
報告書抄録

ふりがな	へいせい10ねんど とんだばやししないいせきぐんはくつちょうさほうこしょ							
書名	平成10年度 富田林市内遺跡群発掘調査報告書							
副書名	富田林市埋蔵文化財調査報告							
巻次	30							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著書名	中辻 亘・栗田 薫							
編集機関	富田林市教育委員会							
所在地	大阪府富田林市常盤町1番1号 ☎0721-25-1000							
発行年月日	西暦 1999年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °' "	東経 °' "	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
新堂廃寺	おおさかふとんだばやし 大阪府富田林市 みどりがおちょう 緑ヶ丘町1604-1	27214		34°	135°	1998.3.19	50.0	寺域などの 範囲確認調査
				30'	36'	＼		
	24"			13"	1998.3.31			
	34°			135°	1998.4.1	85.0		
20'	36'	＼						
	おおさかふとんだばやし 大阪府富田林市 緑ヶ丘町1603-1			22"	11"	1999.3.31		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
新堂廃寺	寺院跡	奈良時代・中世 近世	瓦溜り 落ち込み・溝 土坑・ピット 地山の高まり	軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦 平瓦・須恵器・土師器 製塩土器・黒色土器 瓦器・瓦質土器・陶器 白磁・磁器・螺髪・ 磚仏・サヌカイト・ 鉄釘・焼粘土魂			推定伽藍中軸 線に平行する 地山の高まり を検出	
		飛鳥時代～中世	中門基壇 回廊基壇 参道側溝 溝・土坑 ピット	軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦 平瓦・垂木先瓦・隅木 蓋瓦・須恵器・土師器 三彩・黒色土器・瓦器 陶磁器・鞆の羽口・ サヌカイト・鉄片・ 銅製品・ガラス玉・ 焼粘土魂			飛鳥時代創建 の中門および 回廊を検出。	

版 图



S H97調査区北西部遺構全景 (南から)



S H97調査区南西部遺構全景 (東から)



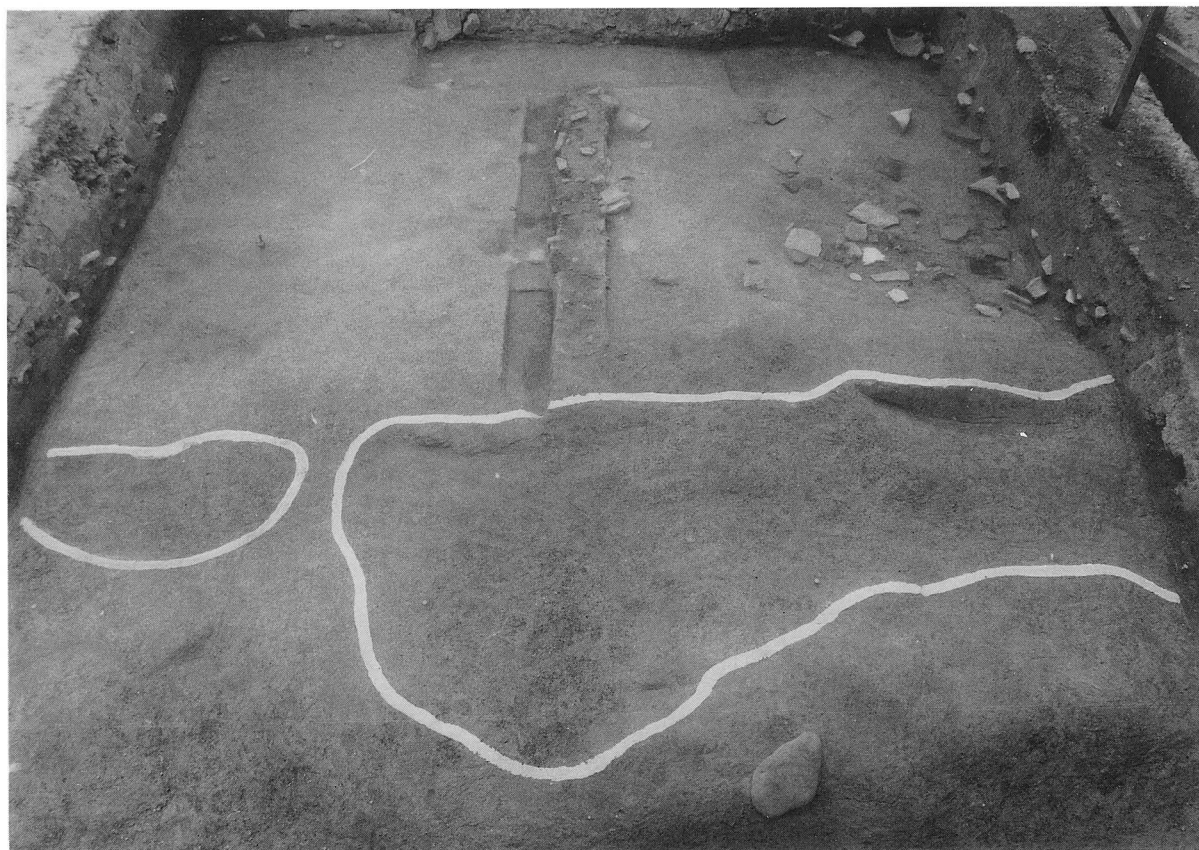
SH97調査区西部土坑1 遺物出土状況（南から）



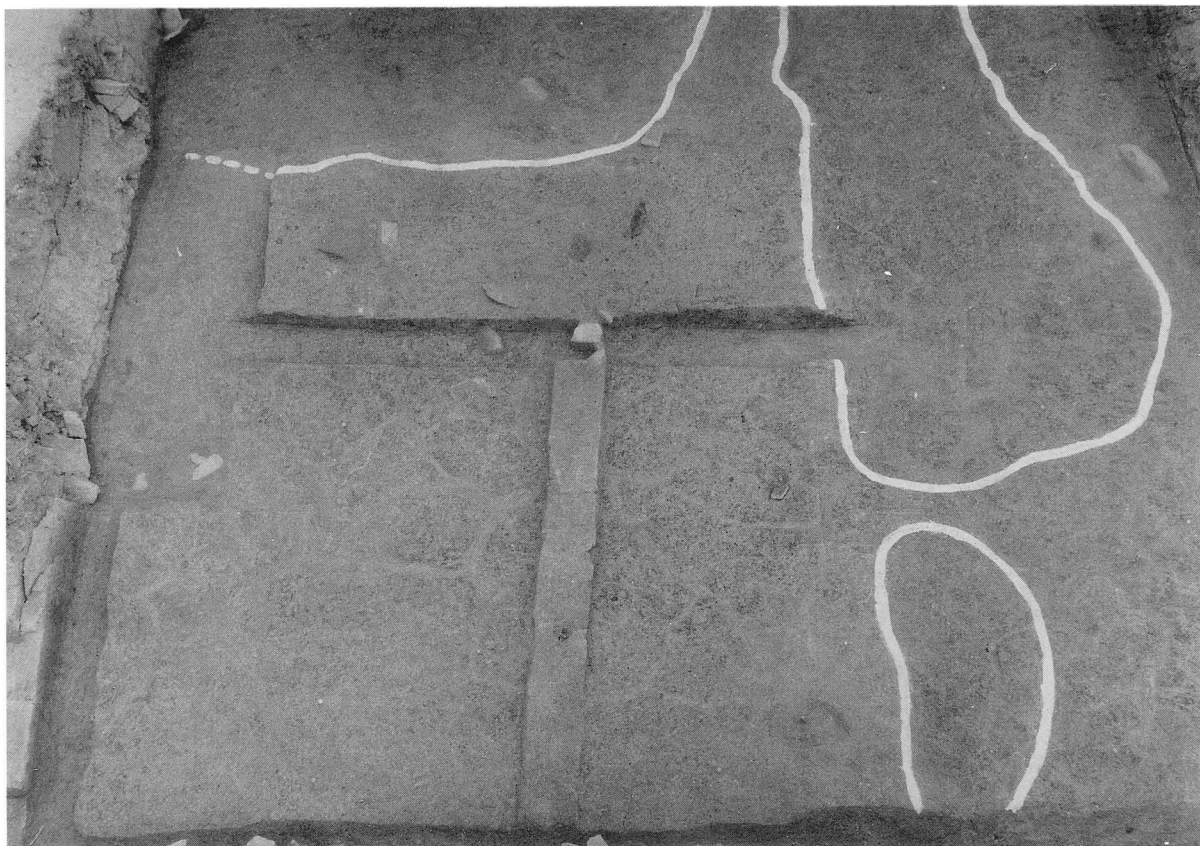
SH97調査区西部土坑1 完掘状況（南から）



S H97調査区北東部第 4 層螺髪出土状況 (南から)



S H97調査区北東部溝近景 (東から)



S H97調査区北東部遺構全景（南から）



S H97調査区南東部遺構全景（西から）



SH98第1面東半部遺構全景（東から）



SH98第1面西半部遺構全景（西から）



S H98第2面東半部全景（東から）



S H98第2面中門東半部全景（南から）



SH98第2面中門・回廊取付部近景（南東から）



SH98第2面 同 上（東から）



S H98南壁断面近景（北東から）



S H98回廊断面近景（西から）



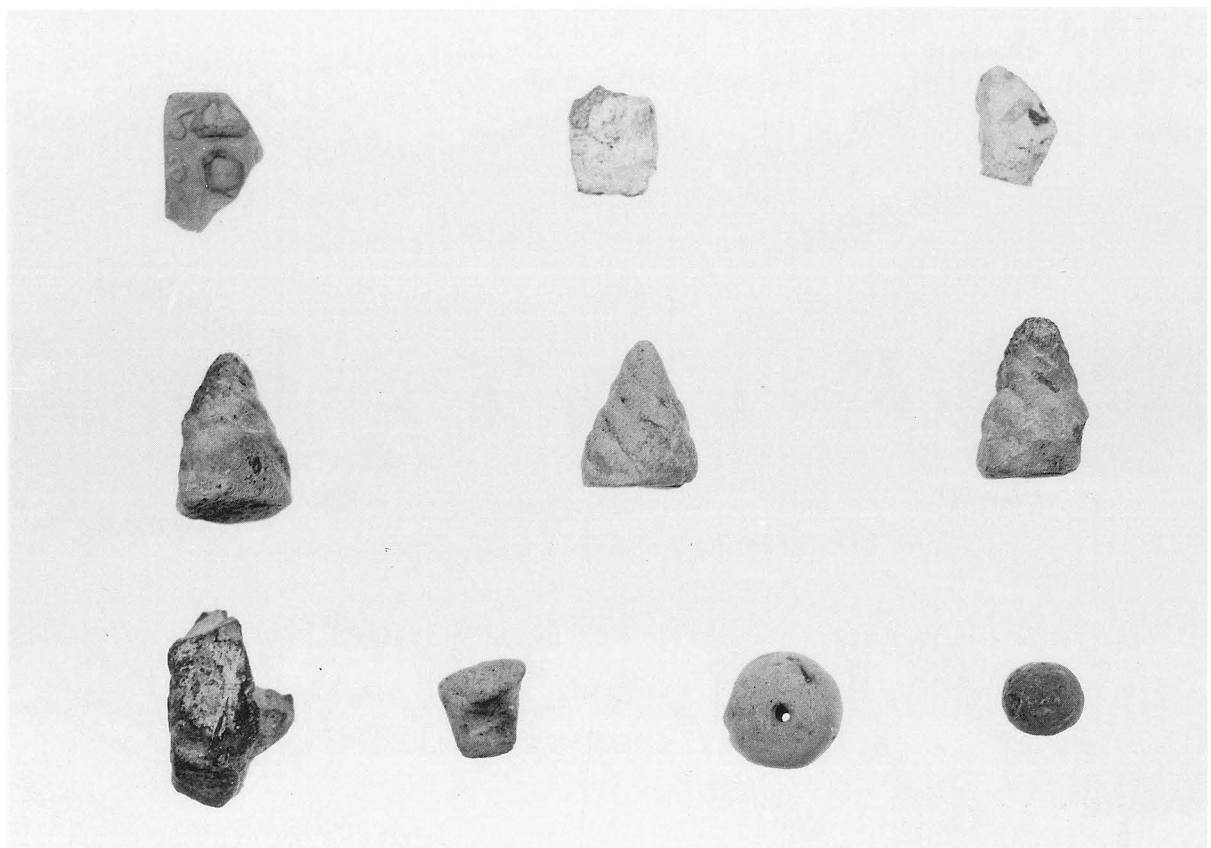
S H98第2面北西部近景 (西から)



S H98第2面中門前面素弁蓮華文軒丸瓦出土状況 (東から)



S H98第2面中門前面素弁蓮華文軒丸瓦出土状況（西から）



S H97出土遺物（磚仏・螺髪・不明土製品）

富田林市埋蔵文化財調査報告30

発行年月日 1999年 3月31日

編集・発行 富田林市教育委員会

住 所 富田林市常盤町 1番 1号

印 刷 橋本印刷株式会社

